

新妹魔王の|亡霊者  
《ゴーストメント》

ダーク・リベリオン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

守るために悪しきものに幼い頃に命を奪われた少年は仙人から受け取った英雄の力とともに蘇った

すべての魔を滅するため、大切なものたちを守るために  
少年は自身の魂と存在を燃え上がらせる

「さあ魂、燃やすぜ！」

# 目次

- 第1話 これからは俺がお兄ちゃんだからな 1
- 第2話 俺はお前らの家族で、俺は：お前らの兄ちゃんだよ 15
- 第3話 お前らなんかには負けるかよ 29
- 第4話 俺は一生お人よしでいいよ 40
- 第5話 俺が今、楽にしてやるぜ！ 52
- 第6話 濡たちに何かしでかすなら容赦はしない 61
- 第7話 家族を見捨てるようなマネはできないね 71
- 第8話 今まで食べたケーキの中で一番美味そう 84
- 第9話 わかった。協力してやるよ 95
- 第10話 お前にはお前を慕う仲間がたたくさんいる 106
- 第11話 上目だけの関係、結局は赤の他人でしかない 118
- 第12話 ぐつ：クソオ！ 134



# 第1話　これからは俺がお兄ちゃんだからな

少年は一人無我夢中で走っていた

彼が目になっているあたり一面に広がる光景

それは炎が立ちこみ焼け崩れる建築物

全身から出血し、死に絶えた多くの人間の腐った匂い

あたりに響き渡る悲鳴の数々

そして少年はようやく一軒家にたどり着く

中に入り少年が見たものは傷だらけの自分と年も変わらない女の子が1つ下の女の子が傷だらけで気絶していた

少年は少女たちにかけてより手をかそうとした。その際に部屋に飾られていたものをつかみあげる

その時、少年たちの前に少女を傷つけた張本人と思われるものの槍と刀を手にした影が現れた

少年は驚きを隠せなかったが少女には見えないのか驚く少年に動揺した

危険を感じ少年は少女に急ぎにげるよう強気な口調で物申し

逃げたことを確認すると影たちに向かつていく

だがそんな勇敢な少年の行為も虚しく影は鋭利なそれを容赦なく振り下ろす  
次の瞬間少年の体からは大量の血が噴き出し少年は床に倒れ込む

影は少年が手にしたものを奪おうとする

その刹那、不思議な光が影たちに襲いかかる

影たちが怯む間に光は少年をつれさり飛び去っていった

◆?◆?◆?

何処かしらぬ滝が流れ落ちる緑豊かな場所へと飛ばされ難を逃れた少年だが、激痛と苦しみと出血により意識はもう朦朧とし

死が刻々と迫っていた

力を振り絞りながら岩に寄りかかる

少年は少女たちの名と家族の名を述べごめんねと呟くとともに息を引き取った  
その時、謎の光とともに怪しい雰囲気のある老人が現れ。少年を見つめつぶやく

「自らの命も顧みず守ろうとするお前のその勇氣、氣に入った…ふふふ」

老人は嬉しそうに笑うのと同時に少年が手にしていたものが光輝くのだった

それから何年かたった現代

とあるお店にて

「なく。なんで親子丼なわけ？」

「限定だぞ、今だけだぞ〜？」

「…俺、食えないの知ってるよな？」

「まあまあ、なんとなくさ」

困ったような顔をする少年に男はそう答えた

「……なあ、霊皿」

「うん？なんだよ？」

「お前妹欲しいって言ってたよな？」

「ん？」

彼の父、東城 迅の突然の質問に息子の東城 霊亜は小首を傾げる

「…まあ。確かに言ってたけど、儂い夢と諦めたよ」シクシク

「よかつたなく可愛い妹ができて」

「……………へっ？」

迅の一言に霊亜はびつくり仰天的な顔で呟いた

「妹…俺に妹が？でっ、でも親父の冗談なんてこともあるしなく…だがもし本当に妹ができるとしたら俺は…」

霊亜は脳内で妄想する

『お兄ちゃん♪』ダキ

『ははは、そんなに抱きつくなくなって♪』

『お兄ちゃんだ〜いすき♪』

『俺もだぞ〜♪』

ホワホワホワ〜



「ぐへへ〜俺に妹〜♪」

靈亜は自身の理性を抑えながらもトイレへと向かっていた

小さい頃から妹を欲しがっていた彼にとつては願ってもないことだった

そんなところで口笛を吹きながらトイレに到着してドアを開けると

「ん？」

「あつ……」

そこには用をすませパンツを履き直す途中の女の子の姿が

それに加えて靈亜はその女の子を一目見た瞬間、何かを感じ取った

「（この感じ……もしかしてこの子？）」

だが、少女の顔が段々と赤くなり始めてはつと我にかえった靈亜がドアを確認すると

「外れやすくなっています。入る時には必ずノックをしましよ……う」アセアセ

この状況はまさに最悪だった

少女が今にも叫びだそうとしていた

「ちよ、ちよいまつて！」なるべく小声

「む〜む〜！」ジタバタ

それを靈亜はとっさに彼女の口を塞いだ

「ごっ、ごめんこんなこととしてでも今騒いだらまずい不可抗力だ入ってるなんて気付か

なかつたんだだから本当にごめん！何度でも謝るから頼む落ち着いて！」

「……」

必死の説得でどうにか落ち着いてくれたようだ

この時も霊亜は少女の愛らしい要素に見惚れていた

「ふう〜…よかつ（べしん！）ですよね〜！」

だが彼女からの怒りのビンタからは逃れられない霊亜だった

「あんたどういうつもり！覗いたうえに中にはいつて口を塞いでいいわけ連発、自分のしたことをよく考えてみることをね！」

「だからごめんてば悪かったよ！だからお願いします許して！」

「また言い訳？ふざけないで「なにやっつてんだお前ら？」…迅さん？」

「おつ、親父？」

そこにいたのは迅と1人の女の子だった

霊亜と少女は互いに相手が迅を知っていることに驚くのがあった

「はじめまして成瀬 万理亜です」

「東城 霊亜です」

「……成瀬 滯です」

「よろしくなく二人とも」

互いに自己紹介をしたはいいが、先ほどのせいかわろのほうはご機嫌斜めの様子で霊亜もどうしたものかと悩んでいた

「こつ、これからは俺がお兄ちゃんだからな、なにか困ったりしてたら頼ってくれな」

「おつ。積極的だね〜霊亜」

「いいだろ別に、二人はこれから家族の一員になるんだろ？」

霊亜の言葉に滯と万理亜は驚く

「霊亜さんって物わかりいい方なんですな。普通ならいきなり家族が出来るなんて少しは躊躇うと思いますけど？」

「そうかな？俺はむしろ歓迎だな。こんなに可愛い妹が出来るんだしさ」

「こいつ前々から妹欲しいっていうほど妹好きだからよ〜」ワシワシ

「うっせえぞ親父！」

霊亜をからかう迅を見て万理亜はくすくすと滯はなにか思うところがあるのか二人を見つめた

よく朝

「う〜ん?」

靈亜が目を覚ますとそこには馬乗り状態の滯がいた

「あつ、やつと起きた。もう、靈亜ったら私が起こしに来たのにかれこれ1時間も起きないんだから〜」

「…おは〜滯♪」

「おはよう」

寝起きの頭をフル回転させ靈亜は尋ねる

「ところでなにやってんだ?」

「起こしに来たっていったでしょ?。男の子ってこうされると嬉しいんでしょ? サービスよ」

「…ナイスサービス!」

グツトサインと万遍の笑みをこぼす靈亜

「何言ってるのよ。ほら、はやく起きて」

「起きる起きる。可愛い妹に起こされて二度寝するやつはいねえよ」

起きて伸びをしていると

「…!?!」

靈亜は自身の右手が透け始めているのに気づいた

「霊亜? どうしたの?」

「あつ、いやなんでもないよ」アセアセ

「そう?」

幸い濡は気づいてない様子だった

「(やばいやばい!)」

霊亜は急ぎ、右手に意識を集中すると右手の透明化が止まりもとに戻る

「ふ〜」

これで安心というかのように一息つく

「どうしたの?」

「うわっ!」

いきなり真後ろから覗き込んできた濡にびっくりした

「なによそんなに慌てて?」

「あつ、いついや別になんでもないよ。あはは」アタフタ

「変な霊亜。うふふふ、ほらいくわよ」

「あつ、ああ、うん(うわ〜あつぶねーバレたかと思ったー!!)」

ホツと胸をなで下ろしリビングへと向かった

「あつ、霊亜さん、起きたんですね?」

「ああまあ…：な？」

霊亜は一瞬固まった。料理を作っている万理亜の姿があまりにもいかがわしいものだから

「…：万理亜ちゃん」

「はい？」

「berry good！」

嬉しそうに good サインを送る

「あつ。もしかして霊亜さん私が裸エプロンだと思ったんですか？…：ふふふ、ざくんねんちゃんとして着てま〜す♪」

くるりと一回転して万理亜が自分の姿を見せびらかす

「あつ…：」 恥

「…：何考えてんのよ変態」

「あつ、いやこれは…：その」アセアセ

「誤魔化さくたつて大丈夫ですよ。霊亜さんも思春期の男の人なんですから♪」  
万理亜のフォローらしからぬフォローに霊亜は涙目になりそうだった

その後、全員で家族写真をとり、霊亜と滯は二人で買物に出かけ

霊亜がバイクを取りに行くと言われて戻ると滯が不良どもにナンパされていた

「近寄らせないで！」

「ふゆ〜強きな子だね〜。君みたいな子、好み〜」

そんないい気分になっていた不良の肩をぽんぽんと叩く霊亜

「あ〜ん、なんだよ今いいところなんだからじゃありませんじゃねえ…よ？」

「よっ〜！」

軽く手をあげる霊亜を見て不良どもが汗をだらだらと流す

「「「れっ、れれれれれ、霊亜の兄貴いいいいいい!?!」「」」」

そして怯えた表情で霊亜のことを兄貴と呼んで叫んだ

「お前らたしか駒村組のやつらだよな? あいつ元気にしてる?」

「えっ、ええ。そりゃ〜もちろんピンピンしてっやつせ。リーダーもたまには顔見せに

こいつて会ったら伝えとけっつていっつてやしたぜ」ゴマスリ

「う〜ん、まあここ最近会ってないしな〜。近いうち顔見せにいくつて言っつていて」

不良どもが霊亜にペコペコする光景に滯は驚く

「…ところで、お前ら何してんのかな〜?」

「「「「「」」」」」」

「人の妹に手をかけるたあいい度胸じゃねえか？」

どす黒いオーラと指を鳴らすその仕草はこの場にいる全員が凍りつくほどの勢いだった

「こっつ、このお嬢さん、兄貴の妹さんなんすか!」ガクガクブルブル

「あく、俺の大事な自慢の妹だ。そんな俺の妹に手をかけるとは…覚悟はできたか？」ギロ

「…いつ、イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

不良たちの叫び声が虚しく響き渡るのだった

ブロロロロロローー!!!

不良に制裁を加えた霊亜は濡を後ろの座席に乘せて帰り道を走っていた

「あつ…あの「ごめんな濡、怖い思いさせちゃって」…えっ?」

「なんもされてないか? ひどいこととかされなかつたか?」

「うっ…ううん。別に」

「そっか…よかつた」

迷惑をかけたことを謝ろうとした濡は霊亜の言葉に驚きを隠せない



滯は靈亜へと質問をすることにした

「…ねえ靈亜」

「うん？なんだ？」

「どうして靈亜は私を助けてくれるの？」

ふと思ったことを滯は靈亜に尋ねる

「滯ってば何言ってるんだ？…当たり前だからだよ。俺はお前らの兄ちゃんだ。妹の危機に助けに行かないなんてそんなの兄貴じゃねえ、まして家族の一員ですらない」

「靈亜…」

「安心しろ。お前と万理亜ちゃんは俺がこの身に変えても守ってやるから。何があつても」

力強く、そして決意を込め、靈亜は滯に注げたのだった

「今から海外出張に行く？」

「ああ、フリーランスってのは信用第一だからよ」

出張のための荷物をまとめおえ、迅は玄関へと向かった

「俺のいない間は「わかつてるさ親父」…」

「妹たちの面倒をみるのは長男の俺の仕事、今朝の件についてもな…だろ？」

「ふふ、わかってんじやねえか。だが俺のいない間に面倒なことおこすなよこいつ」ツン

「さくて、どうだろうな〜」

おどけた感じの親子のやりとりを終えて迅はタクシーにのって行ってしまった

「お〜い漣、万理亜ちゃん。晩ご飯何にしようか？」

リビングに戻ると暗い中、漣はソファーに座り、そのよこに万理亜が立っていた

「どうしたん？二人とも？」

「ねえ霊亜、お願いがあるんだけど？」

「ん？なんだい？」

「この家から出てって」

漣からつけられたのはその一言だった

## 第2話 俺はお前らの家族で、俺は…お前らの兄ちゃんだよ

「この家から出てって」

澪は冷たい表情でそう呟いた

「…そんな」

「澪さまのお言葉が聞こえませんでしたか？ 霊亜さん。あなたにはここから出て行って

「そんな悲しいこと言うなって♪」 ちよ!?!」

「ふえ!?!」

霊亜の予想外すぎる反応に加え、何食わぬ顔で二人の頭を優しく撫でる

「ちよっ、ちよっ と 霊亜さん。あなた自分が今どういう状況にいるかわからないんですか!?!」

「えっ、なにつて妹がこんなこと言うのつて一つしかないだろ。お前ら反抗期なんだろ

♪」

「はあ!?!」

緊張感もへったくれもない態度な霊亜に驚きの声をあげる二人

「ごめんなく、俺がすっかり気づいてればよかったのによ。悩みがあるなら言ってくれ力になるぜ?」

「ふざけないでください!!」

すると万理亜の体から青いオーラが湧き出て着ていた衣服がいかげんしい衣服へと変わり耳が尖り尻尾と羽が生えてきた

「これが私の本当の姿、どうですか?理解できないでしょうね自分以外の種族の存在はほへー万理亜ちゃんサキュバスだったんだ。はじめて見たよ、ぞくに言う夢魔だっけ?」あつあれ?!!」

驚くどころかむしろ興味を刺激してしまったのか万理亜のあつちこつちを見る霊亜「ちよつと霊亜さんなんなんですか!?!」

「何が?」

「普通なら驚くところですよ!私サキュバスなんですよ!人間じゃないんですよ!?!」  
「わかつてるって」

霊亜はそう言うとうと万理亜の頭をぼんぼんと叩く

「俺の妹がサキュバスだつてことだろ?」

「なんでそんな平然としてるんですかおかしいですよ!!」

「ほらほらたかいたか〜い♪」

「わ〜い♪…はっ!?!じゃなくて!!」

完全に場の空気は靈亜に乗っ取られていた

「そこまてよ靈亜!」

「滯?」

「あん…尻尾の先、くすぐられ…たら。…ううん」

万理亜で遊ぶ靈亜の前に滯が立つ

「さつきも言ったけどもう一度だけ言うわ。この家からでてって!」

滯は改めて靈亜に申した

「なんで?家族で一緒に暮らそうよ」

おどけた言い方で滯の申し出を拒否する

「さつ、さつきから失礼ですよ靈亜さん!」

やっと開放してもらった万理亜は滯の隣にたつ

「滯さまは未来の魔王なんですよ!」

「へ〜魔王ね〜」

全然驚く気配もみせない靈亜だった

「そう、そしてこの家は今日より滯さまの第一の拠点となるのです!」

「つまり俺らの拠点ね。なるほどなるほど」

「なに勝手に付け加えて納得してるんですか!？」

万理亜は霊亜に突っ込みをかますしかできずにいた

「わからないの霊亜?、私たちがこの家に来のはここを拠点にするため、私たちの関係はただのごっこ遊びに過ぎなかったの!どう?これが私たちの本当の姿よ!わかったなら痛い目にあう前に出て行きなさい!」

「ん〜。俺には濡れたちがそういう子には思えないな〜」

「ちよつと!?!」

これでもかと言わんばかりに怒鳴り散らしたにも関わらず霊亜は自分のペースをくずさない

「だって濡れは本当はこういうことをするのが嫌な心優しい子だって知ってるから」

「だからあれはあんたたちを油断させるために」

「お前らに何があったかは知らない。でも今まで辛い日々を送ってきたんだろうことはわかる。でも大丈夫、これからは家族みんなで楽しい思い出を作ればいい、辛い日々なんて忘れるくらいさ。そうだと濡れ、万理亜ちゃん」

ここまでするともはや諦めるしかなかった

霊亜になにを言っても無駄だ。彼は自分たちを家族と信じてやまない

それが逆に彼女たちの心に痛く突き刺さった

「…んで」

「ん？」

「なんでそんな簡単に受け入れようとするのよ！」

ついにたまらず滯は瞳から涙を零しながら言い放った

「私たちはあんたたちを騙してたのよ？家族になるふりをしてここを奪おうとしたのよ！普通は許せるようなことじゃないじゃない！それでもまだあんたは私たちを家族だというの!？」

「うん」キツパリ

「なんで!？」

霊亜の即答に滯は床に四つん這いに倒れ込む

「なんなのよあんたは…」

「滯さま」

涙をぬぐう滯に駆け寄りなぐさめようとする万理亜

そんな二人に霊亜は近づく

「俺はお前らの家族で、俺は…お前らの兄ちゃんだよ」

二人の頭を優しく撫で、笑顔を向ける霊亜のこの行為が滯の以前の楽しかった日々のことを思いださせた

しかしそれは同時に滯にとって忘れられないあの出来事を思い出させた

すると滯は霊亜の手をはらい庭の窓をこじ開ける

「滯!?!」

「もういい…もういいわ。ここにいたら私がおかしくなっちゃう…このままじゃ本当に自分の立場も忘れて霊亜と万理亜や迅さんとこのまま一緒にいたいと思っちゃいそう…だからお別れよ!」

そう言うとき滯は家から飛び出していった

「滯さま待つてください!」

「万理亜ちゃん」

霊亜の呼び止めに一瞬霊亜を見つめる万理亜、彼女自身も滯と同じようなことを感じたがため罪悪感からかまともに彼の顔を見ることができず逃げるように滯を追いかけた

「滯…万理亜ちゃん」

二人のいなくなったリビングに霊亜はただ佇むのだった

◆? ◆? ◆?



「滯さま大丈夫ですか？」

「馬鹿よ。霊亜は底なしの馬鹿…あんなに優しく接せられたら…どうしていいかわからなくなるじゃない！」

文句をいいつも滯の心は霊亜の優しさと暖かさでいっぱいだった

「霊亜と一緒にいるとあのころのことを思い出しちゃう、お義父さんとお義母さんの楽しかった日々を…でも」

そう思えば思うほど失った時のあの絶望感が蘇りそうで、滯はそれが堪らなく怖かった

「滯さま…」

万理亜が滯の側に寄り添おうとした時、異変は起きた

「人よけの魔法!?!」

「…敵です」

すると突如として不気味な得体の知れない者たちが現れた

「ふへへへ。見つけたぜく旧魔王の娘」

「貴様の命をもらいうけに来た」

一方の影は槍を構えもう一方は右手自体が剣であり、それを突きつけるようにむかってくる

「なんだか知らないけどやれるものならやってみなさいよ！」

「もう敵が目の前にいるのですか！」

「えっ？万理亜には見えないの？」

「私にはなにも…？」

どうやら自分には見えて万理亜には見えない敵だと滯は悟った

「だとしても構わない！倒すだけよ！」

呪文を唱え魔法陣を出現させ火球を放つ滯、万理亜はあたりを警戒する

「こんな炎の塊、屁でもない」

「無駄な抵抗はせず、さっさと死ね！」

だが、敵には全くと言っていいほどダメージにはなっただけではなかった

そして長引くにつれて段々敵に押され始める

「きゃあああああ!!!」

「万理亜!!?このおお!!」

姿を見ることができな万理亜は敵にとってはいい的ではなかった

滯は怒り、魔法で攻撃するも魔法は同時に滯の氣力を消費させてしまうため、使用す

るたびに滯は息を切らし始める

だが、敵にはそれは好都合でしかなかった

「ふふ、はあああ！」

滯にむかつて何体かが飛びかかる

「ぐっ、はあああ!!」

魔法で迎撃する滯だったが敵はそれをよけて滯にその刃をむける

滯は自身が斬られるという恐怖にかられた

だがその時

「!？」

滯の服の内側の胸元部分が赤く光ると同時に彼女の体を神秘のボールが包み込んだ

「小賢しいー！」

敵の槍術を食らってしまうも神秘のボールが彼女を守り、人体には害はなかったが

「きやああああ!!」

勢いの強さで滯は吹き飛ばされた

地面に体を打ち付けながら滯は倒れた

「グッ…」

必死に立ち上がろうとするも既に目の前には敵が鋭き刃物を突きたて自分を狙って



「滯さま、霊亜さんがどういたんですか!」

万理亜は姿が見えないため霊亜が

「(また私は失つてしまった。家族を…私があんなことしなければ霊亜がこんなことになることは…私のせいだ!)」

自身がしてしまった結果に後悔と罪の深さを感じた

「…泣くな滯」

「へっ?」

まさかと思いい顔を上げるとそこには尚も血を流しながらも自分の頭を優しく撫でる

霊亜がいた

「はああ!!」

「ぐはあ!」

「れっ、霊亜どうして!?!」

「ああこれ実は…あつ」スケスケ

勢いよく敵を蹴りとばし滯のほうを向くとタイミング悪く体が透けた

「れっ、霊亜!」

滯たちも驚きを隠せない

「おいおい、かっこつけて出てきた割には随分しまらねえ登場の仕方だなおい」

「うるせえよー！」

靈亜のそばに寄ってきたのは小さいおばけだった

「なっなんなの？」

「ああ、こいつはユルセン。まあ俺の相棒ってところかな」

「よろしくな！」

ユルセンは軽く挨拶する

「…久しぶりだなおい」

靈亜は敵を睨みつける

「あゝ？何言ってるんだお前」

「忘れたとは言わせねえぞお前らのせいで俺は命を奪われ故郷の…勇者の里のみんなが  
どれほど悲しんだことかー！」

「勇者？…靈亜、あなた勇者の一族？」

滯は靈亜が勇者の一族であることに驚く

「勇者の里…貴様あの里のものか？」

「ああ、そんでもってお前の刀に切り殺されたあの時のガキだよ」

「ほく。まさかあの時のガキが今こうして我らの前に現れるとは」

「馬鹿な奴だ。あのまま死んでれば良かったものを。わざわざまた俺たちにやられるた

めに生き返ってくるとはな〜」

敵はかつて自分たちのしたことを思い出し、せせら笑う

「……俺を殺したことも里を襲ったことも許せねえが、俺が今それ以上に許せないのは俺の妹を傷つけたことだ！お前らは俺がこの場で地獄に送る！」

そう言ううと霊亜は腹あたりに手をかざすと

腹にドライバーが出現する

そして目のようなもののスイッチを押すと瞳にGと浮かび上がった

そしてそのままそれをドライバーに挿入する

『ア〜イ〜』

するとドライバーから声が流れる

『バッチリミナー！バッチリミナー！』

フワフワフワ〜

効果音が流れるとともにドライバーからオレンジ色のパーカーゴーストが現れ、ファンキーにおどる

「……変身」

ポーシングを終えてレバーを押すように動かすと

『カイガン!』

Gと書かれたアイコンが顔をイメーシしたマークに変わり、霊亜の姿が光を放ちフオームの素体姿トランジェントへと変り、パーカーゴーストが素体に覆いかぶさった『オレ! レッツゴー・覚悟! ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!』

そして次の瞬間には霊亜の姿は変わっていた。否、変身していた

「れいあ…なの?」

霊亜と思わしきその者は頭に被さったフードを下ろした

「さあ魂、燃やすぜ!」

今、ここに愛するものを守る戦士が悪へと立ち向かうのだった



### 第3話 お前らなんかには負けるかよ

「それはアイコン!…貴様何者だ!?!」

「地獄から蘇った魔狩りの亡霊さ!」

「小賢しい!」

敵が剣と槍を構え霊亜に襲いかかる

霊亜もバツクルの中から剣を取り出し応戦する

ガキンガキンと互の武器がぶつかり合う

「くらえ!」

「ふふふん」ヒョイ

「今度はこちらだ!」

「へへふん」ヒョイ

霊亜は華麗な動きで敵の攻撃をかわす

「ちっ、ちよこまかと!」

「ほらほら、鬼さんこちら手の鳴るほうへ〜♪」

宙をふわふわと浮く霊亜は敵をおちよくる

「くそおおおー！」

「そりやー！」

「ぐわああ!!」

反撃しようとする敵の攻撃も軽く防いで一撃を与えた

「さくで、決めるか。はあああ…」

オーラを纏いて印を結び

トリガーを引くとベルトがまばたきし、目にキックのマークが現れた

『ダイカイガン！ オレ！ オメガドライブ!!』

右足に力が注がれる

「うおおおおさせるかあああ!!」

槍をもった敵が霊亜に向かっていく

「ふっ、はああ!!」

「がああ!？」

「おりやあああ!!」

「ぐわあああああ!!!」

凄じい威力のキックにより敵は断末魔をあげて爆死した

「すつすごい…」

「どうなんですか滯さま？」

「霊亜が敵を1人やつつけたわ」

霊亜の凄さに驚く滯だった

「まだまだこんなもんじゃないぜ」

物陰から様子を見ていた滯たちは驚きを隠せず

ユルセンはわかっているかのように霊亜を見る

「後はお前だけだな」

「…図に乗るなよ。相手が1人だけと思うなよ」

すると敵が手にしたアイコンをばらまくとそれがたくさんの兵士へと変わる

「やれ！」

「！！！！ウオオオオオ！！！！！！」

「ちっ！」

霊亜は負けじと応戦するもやはり数で圧倒される

「いくら強かろうと所詮数には勝てん！」

「ぐあああ！」

敵の斬撃が靈亜を吹き飛ばした

「靈亜！」

「滯さまどうなっているんですか!? 靈亜さんは!？」

靈亜が危険な状態になっていることに動揺する滯に姿の見る事ができない万理亜は状態を尋ねる

「押されてるな…このままじゃ靈亜のやつやられちまうぜ！」

「うわっ!?! なんでするかあなたは!?!」

「名前はユルセンって言って靈亜の相棒らしいの！」

「感謝しろよ。これであんたにも見えるようになったぞ！」

万理亜はユルセンの言っていることがあまりよくわからなかったが

すぐにその理由に気づく

「はっ! 見える…私にも靈亜さんと敵が見えます！」

「言ったとおりだろ！」

ユルセンは誇らしげに言った

しかし、だからと言って状況が変わるわけではない

「どうするのよ！このままじゃ霊亜はやられちゃうんでしょ!?…霊亜が頑張ってるのに私には何もできないの…私にもっと力があれば。」武蔵「みたいに強ければ！」

「漣さま」

非力な自分を恥ぢる漣に万理亜が寄り添う

その時、漣の胸元部分が光を放つ

「また光が…?」

「これはいったい?」

「おいおいまさか…喜び、霊亜を助けることが出来そうだぜ」

「えっ?本当!?!」

ユルセンはいち早く気づいたように漣に告げた

「お前が首に下げてるものを霊亜に託せ！」

「首から下げてるもの…!」

ユルセンは尚も光を放つ漣の胸元あたりを指さす

漣は急ぎ首に下げていたものを内側から出す

それは以前、漣の義父と義母が彼女にお守りとしてくれた宮本武蔵の刀の鍔だった

義父曰く、武蔵のように強くなりたいと思えばなんでもできると。事実これをもらっ

てからというものの滯は自分が悲し時や切ない時に自分は強いとこれに祈りをこめると不思議と気持ちちが和らぎ強くなれるという気になれるのだった

「…でもこれがいったいなんの役にたつものよ？こんなんで霊亜を助けられるわけないじゃない？」

「それはお前の両親が魔力で鏢の姿に変えてあるだけさ。どうやってカモフラージュしたかは知らないけどな」

「お義父さんとお義母さんが…？」

「霊亜ならその魔法の封印を解くことが出来る。急げ、霊亜を助けたいんだろ？」

ユルセンが滯の気持ちを後押しするように今尚戦っている霊亜を指さす

滯は決意すると立ち上がり鏢を握り締める

「霊亜！」

「滯？」

「これをうけとって!!」

「つと！…これってもしかして？」

霊亜にむけて滯が鏢を投げ、霊亜がそれをうけとった

「アイコンだ！目を描け！」

「簡単に言ってくれるな！」

襲いかかる敵を掻い潜りながら罠に目を描くと罠が煙へと変わり

次の瞬間、煙は再び形を成し赤いパーカーのゴーストへと姿を変えた

その光景に滞たちは驚く

「こいムサシ！」

霊亜の呼びかけに答え、ムサシパーカーゴーストがベルトに飛び込んできた

そしてベルトから武蔵の力を宿したアイコンが出てきた

「武蔵のアイコン！」

驚く敵をよそにベルトを開くと霊亜は滞のほうを見つめた

「滞…お前がどう思っているように構わない、お前はやっぱり俺の自慢の妹だ。まってる

こいつ倒して帰るぞ」

そう言うアイコンのスイッチを押す

「…霊亜」

「万理亜ちゃんもだぞ」

「霊亜さん」

『ア—イ！』

アイコンを外すとオペレーターゴーストが離れて再びトランジェントの姿に変わった

『バッチリミナー！バッチリミナー！』

ベルトにムサシのアイコンをセットしたと同時にベルトから現れたムサシパーカー  
ゴーストがザコ眼魔を数体斬り倒した

『カイガン！』

霊亜はそのままトリガーを引くとベルトがまばたきムサシの顔をイメージしたマ  
クに変わる

『ムサシ！ 決闘!!ズバツと超劍豪!!』

トランジェントの姿ゴーストにムサシパーカーゴーストが覆いかぶさり

赤き姿へと変わっていた

「姿が変わった！」

「武蔵の力を手にした姿さ」

「いってください霊亜さん！」

ガンガンセイバーを二刀流モードにチェンジする

「ふん。いくら武蔵の力だろうと数で圧倒してくれるわ！」

ガキン！ キンキン！

「ばーか、これには武蔵の力だけじゃねえ！」

「ぐあー！」



「滞の想いも籠ってんだ。お前らなんかに負けるかよ！」

先ほどとは打って変わって2本の刀で兵士を蹴散らし残るはただ1人となった

「おのれー！」

「はっ、せりゃー！」

「ぐあああ！」

敵が靈亜に挑むも返り打ちにあい地べたを転がる

靈亜はその隙に剣をベルトにかざす

『ダイカイガン！ ガンガンミナー！ ガンガンミナー！』

背後に目の紋章が現れ、2本の刀が炎を纏う

「くっ、うおおおお！！」

「はあああ……うらあ！」

敵の攻撃を小太刀で受け流し大太刀で切り裂き

「はっ！はあ！！」

連続で敵に斬撃を浴びせ、最後にガンガンセイバーのトリガーを押す

『オメガスラッシュ！』

「はああああ！！！！」

「ぬお……ぐっ、グアアアアアアアアアア！！！！」

断末魔とともにもう一体も霊亜の前に敗れ去ったのだった

「ふう〜」

『オヤスミ〜』

戦いを終えてアイコンを抜くと霊亜の姿は元に戻った

「やったな霊亜」

「どうぞんだつての!」ドヤ

「ほらよ眼魔のアイコンだ」

「サンキュー」

霊亜はユルセンから眼魔のアイコンを受け取ると目を描いた

すると眼魔アイコンが形を変えて、赤く光る魂へと変わる

「あくがぶっ…ゴクツ…ふ〜。ご馳走様でしたっ」と手合わせ

霊亜はその魂を飲み込むと何回か嘔み締めごくつと飲み込み手を合わせた

「これでまた少しの間は大丈夫だな」

「ああ、あとでもう一個も回収しとかないとな」

「じゃあ後は頼んだぜ〜」

ユルセンはそう言うのを消していなくなった

「…霊亜」

振り向くと漣と万理亜が申し訳なきように靈亜を見ていた

「靈亜……その、私「漣！万理亜ちゃん！」!?」

「!?」

彼に対しひどいことをしたうえに勝手に出て行ったにも関わらず、自分たちの無事に安堵し、自分たちを抱きしめる靈亜に驚く二人

「よかった。無事で二人に何かあつたらと思うと俺!」

「れい……あ……」ジワ

「れいあ……さん」ジワ

自分たちここにここまで心から心配してくれたことに嬉しさと罪悪感が同時に湧き出し

「うっ、うわああん!ごめんなさい!」泣

「ごめん、ヒク……なさい!」泣

「大丈夫、大丈夫。さあ帰ろう。それにいろいろ聞きたいだろうからな」

優しく二人の頭を撫でながら

しばらくの間、靈亜は自分の胸を二人が泣き終えるまで貸してやるのだった

## 第4話 俺は一生お人よしでいいよ

眼魔との戦いを終えて

「…なるほど。つまり霊亜さんと迅さんはともに元勇者の里の人間で、あの眼魔という化物が里を襲ってきて、その際に眼魔に命を奪われたところを仙人に助けてもらって生き返り、里のみんなのために自ら出て行って今につながるんですね。おまけに私たちの正体も最初から知ってたなんて。本当に食えない方々ですね」

「あはははごめんごめん」アセアセ

「霊亜さんはなんでも知ってるんですね」

「なんでもは知らないさ、俺が知ってるのは知ってることだけさ」

現在、霊亜は万理亜に自分のことを話しており、澤はその間に入浴中であった

「私たちの正体もしようとしてたこともお見通し…最初から手のひらで踊ってただけなんて、まったく霊亜さんには敵いませんね」

「別にそんなつもりはないさ。俺にとつては万理亜ちゃんたちが人間だろうが魔族だろうが家族には変わらないからな。あのまま正体を隠してい続けてても俺はなんにも触れずに接しようと思ってたし」

「心が広いんですね霊亜さんは」

「まあ〜な」ドヤ

得意げに威張る霊亜だった

入浴を終えて風呂場から出てきた滯は先ほどの戦いのことを思い出す

「万理亜に魔力の使い方を教わったのに、霊亜がいなかったらあのまま私は殺されてた。思い出しただけで震えが止まらない。ダメだ私は…」

滯が落ち込んでいると

『大丈夫だよ滯、お前には俺がついてるからさ』

「霊亜……えっ？霊亜？」

『よっ』

ドア越しから霊亜が滯に話しかける

『ごめんな滯』

「なっ、なんで謝るのよ」

『いろいろ隠してたからさ。俺が勇者の一族であること。俺が……死人だっということか

さ』

滯に謝罪する霊亜はいつになく悲しそうに呟いていた

『驚いただろ？死人だつてことを知って』

「…うん」

事実あの時、滯は心底驚いていた

敵に霊亜が刺された時。霊亜の体が透けた時のことが

『…怖かった』

「えっ?」

霊亜から滯にとっては信じられないような言葉が帰ってくる

『俺の秘密を知ったら滯たちが俺の前からいなくなるんじゃないかってさ…俺にとってお前は家族だ。どんなことがあると…でも滯はどうなのかって思ってた。もしかしたら俺のことを拒絶するかもしれない、一緒にいられなくなるかもと思うと、それがとてつもなく怖かったんだ』

「霊亜…」

『でも、もうお前は俺の秘密を知った。…もしお前が俺を拒絶や非難するならそれも覚悟しているよ』

「違う…私は…」 グラ

ドテ

『…漣？おい漣大丈夫か？』ガチャ

物音を聞きつけ霊亜が入ると漣が倒れていた

「漣！」

気づいた霊亜はあわてて駆け寄る

「大丈夫か？」

「…平気」

「のぼせちゃったんだな。立てるか？」

ペシッ！

「!？」

伸ばした手を叩くように漣は払う

「…漣？」

「バカ」

「えっ？」

「霊亜、私を舐めすぎよ。そりゃ最初は驚いたわよ…でもだからってそんなことくらいで拒絶とかしたりするような安い女だと思わないでほしいわ！」

漣は怒鳴るように霊亜にいった

「…それにあんただってそうだったじゃない。私と万理亜が正体明かしても平然としてたし」

「そつ、そうだな」

「本当、あんたは超ド級のお人よしよ」

呆れたように滯は呟いた

「いきなり妹としてこの家に来た私たちを…魔王の娘だと知つてもなお私たちをあつさり受け入れて、これをお人よしって言わなければなんだっていうのよ？」

「ふふ、お人よしか…そうかも shouldn't かな」

照れくさそうに靈亜は答える

「…でも」

「っ！」

すると靈亜は滯の頭を優しく撫でた

「それで滯たちを守るなら、滯の笑顔を守るのなら。俺は一生お人よしでいいよ」

「!？」

言い放った。いつになく真剣な表情を浮かべ靈亜は言い放った

その言葉と目には一切の偽りもない。

ただ純粹に滯を万理亜を守るといふ意思を持った目だった



「…本当にお人よしのバカなんだから」

「照れる顔、やっぱ可愛いな」

「うっ、うるさいわね！」

二人の空間があたりを包む

「おや〜？お二人共すっかり打ち解けたようですね〜」

「なっ、なによ万理亜、私は別に！」

「霊亜さんの戦う姿に見惚れてたくせに〜」

「しっ、してないわよ!!」

滯と滯をからかう万理亜に苦笑いをする霊亜だった

「…で、そろそろ聞きたいんだろ？俺のあの姿のことを」

「うん」

「はい」

リビングへと場所を移して滯たちは霊亜にあの姿について尋ねる

「あの姿の時の名はゴースト。仮面ライダーゴーストだ」

「仮面ライダー…」

「ゴースト……」

二人は聞きなれない単語に小首を傾げる

「そう、俺はゴーストとして眼魔と戦う使命がある」

「あいつらのことね」

滯は自分たちを襲った眼魔たちを思い出す

やつらは強かった。自分の力ではどうすることもできず、無力であることを思い知らされた

「あんな奴らがいたなんて」

「私のはあのユルセンっておぼけがいなければ姿すら見えなかつたです」

「当然さ、眼魔は本来人間の目には見えないんだからな。いや、万理亜ちゃんも見えなかつたとなると悪魔もか？」

「「えっ？」」

霊亜の驚きの一声に声をあげる二人ではあつたが

先の戦いで姿を直視出来なかつた万理亜にとつては納得いく話であつた  
「でもだつたらどうして私には眼魔が見えて万理亜には見えなかつたの？」

「奴らを直視する方法はいくつかあるが滯が奴らを見た理由はこれだ」

そう言うとうと霊亜が見せたのはアイコンだつた

「それって」

「そう、武蔵の鍔にカモフラージュしてたこれだ。これを持つ者は普段は見ることもできない眼魔を見ることが出来る。後はユルセンが触れてる者もな。ほかの方法は今のところないかな」

「気になってましたがアイコンってなんなんでしょうか？」

「アイコン、これにはかつて歴史に名を轟かせた英雄の魂が宿っている」

「英雄の…魂」

自分がもらっていた鍔がそんなにすごいものだったことに驚きを隠せない滯だった

「そう、そして俺は今、この英雄のアイコンを探し集めているんだ」

「どうしてアイコンを集めるの？」

なぜと霊亜に聞く滯に霊亜は答えた

「このアイコンを15個集めた時、集めた者の願いを叶えてくれると言われるんだ」

「まるでどこぞの漫画雑誌に出てくる7つ集めるとドラゴンがでる玉みたいな感じですね」

「あはは。まあそんな感じ、その力で俺を生き返らせてくれと願うのが目的だ」

自分のなそうとすることを二人に打ち明ける

「なるほどなるほど。それで」

「ただ、集めるのはいいんだが。俺のこの体にもデメリットがあつてな」  
「デメリットつて？」

霊亜の言ったデメリットが気になった滯は問うた

「俺は今、魔力で存在を維持している。つまり俺は魔力が尽きた瞬間にこの世から完全に消滅する」

「!?!」

消える。その言葉が霊亜の口から放たれた瞬間に二人は驚く

「魔力が尽きたら消滅つて…」

「そんな…」

「もしそうなたとしたら俺の魂がどうなるのかはわからない。もしかしたらこの世から消えるだけじゃない、魂すらも消滅するかもしれないんだ」

そういつた恐怖と常に霊亜は戦いながら今までを過ごしてきたのだ

「魔力が尽きたら消滅はわかりましたが、魔力を回復することはできないんですか？」

「もちろん魔力を回復させる方法はある。それがこれさ」

そう言つて霊亜が見せたのはあの戦いで倒したもう一体の眼魔の魂だった

「これが眼魔たちの魂、眼魔魂さ」

「眼魔魂？」

「そう、眼魔のアイコンに目を描くことで具現化する魂さ。こいつこそ、俺の魔力を回復させることができるアイテムさ。これを食えばおよそで言えば最低1ヶ月は持たせられるかな」

話しを聞いて眼魔魂をまじまじと見つめる二人

「ただ。さつきも言ったがこれはあくまおよそでだけで力を沢山使えば魔力はその分だけ減り、俺がこの世にいられる時間が短くなっちゃうだけだよ」

「じゃあそれまでにアイコンを15集めないと霊亜は…」

「…そう。一応今まで集めたアイコンは滯の持っていた武蔵のアイコンを含めて全部で4つだ」

「では残り11個ということですね」

万理亜の問いに霊亜はうなづいた

滯は少し考え込むと決心した表情で立ち上がる

「……霊亜！」

「えっなに？」

「私たちにもアイコンを探すのを協力させてほしいの！」

「えっ？」

滯の一声に霊亜は驚く

「私、守られてばかりはもう嫌なの！少しでもいい、私は出来ることがしたいの！…それに」

「それに？」

「…あつ、あんたに貸しを作つてばつかじや私の気が収まらないの！だから、あんたが生き返るために私が協力してあげるって言つてんのよ！反論なんかさせない。やるつたらやるんだから！」

そう言う滯だが内心は少し違つていた

「(きつと霊亜なら私を守るためなら簡単に命を投げ出そうとしちゃうはず。いくらゴーストだからつてそんなの危なすぎるわ、私がしっかり見てなきや。もう霊亜にあんな危険なことをさせたくないもの！)」

霊亜の身を案じる優しい思いだった

何はともあれはつきりと自身の思いを伝えた滯を見て霊亜は啞然とするもすぐに笑みを浮かべ滯を優しく抱きしめる

「ありがとう滯。なんていい子なんだ…お前が俺の妹で本当に嬉しいよ」

「なつ、何言つてんだか…」

霊亜の言葉に照れくさそうに顔を赤らめる滯だった

「なるほどなるほどそうですか。実は1つ今後のアイコン集めに役立かもしれない方

法があるんですよ」

「えっ？」

「そんな方法あるの？万理亜？」

「おまかせください。ぬふふふふ」

このあと万理亜の方法のせいで濬が苦勞する羽目になるのは言うまでもないお話し

：

## 第5話 俺が今、楽にしてやるぜ!

前回、今後のアイコンを集めの協力を申し出た溘

それに伴い万理亜が霊亜たちに提案したものは…

「主従契約魔法、霊亜さんとは溘さまと主従の契約を結んでもらいます」

リビングの床に魔法陣が刻まれており、準備は整っていた

「質問、なんで主従関係になる必要があるん？」

「まああくまでも形式上ですが契約することにより魂が結ばれた者同士なら互いを感じることができるですよ。その特性を使ってアイコン集めの効率を上げようということですよ」

「ふむふむ…なるほどな」

「ではご理解いただけただけですよ。ですので早いとこ進めましょう。この魔法は万月の時にか使えないんですよ。ちょうど今夜は万月、このチャンス逃す手はありませんよ！」

「そうなんだ」

霊亜は万理亜の説明を聞いてこの魔法のことを理解する

「でもいいのか溘？」

「べつ別に私はいいいけど…霊亜はあたしとじゃ嫌？」



「いや、全然。むしろ喜んで」キツパリ

「そつ、そう…まあ居場所がわかればいいし」

あまりにも即答だったので逆に滯のほうが困ってしまふ

「では、お二人共同意ということで早速はじめましょう！」

そう言いながら万理亜は滯の手を取る

「滯さまにとっては初めての魔法ですのでサポートはまかせて下さい」

「うん」

「…滯さまの手の甲に出た魔法陣に霊亜さんがキスすれば契約成立です」

万理亜が契約の流れを説明する

「えく。手の甲なのく…どうせならほつぺとかがいいな」

「なっ!?!」

「なるほどそれはめい a…ゲフンゲフン。だつ、ダメですよ霊亜さん」

「そうよ！ただの契約でなんでそこまでしなきゃなんないのよ！」

滯の否定に軽くシヨツクな霊亜だった

その時だった

「うん？」

霊亜の手の甲に魔法陣が現れた

「万理亜ちゃんが言っただのって…これ？」

「えっ？」

「ふっ…ニヤ

「ちよつとどういうことよ万理亜!？」

先ほどと手順が逆なことに気づいた滯が万理亜に怒鳴るように問いただす

「あつれくおかしいですね。どこで間違えたんだ」  
「どうするのよ!?!これじゃ!」  
とつ、  
とりあえずこうなつたからには滯さまが霊亜さんの手にキスすればいいかと

「冗談じゃないわよ!なんで私が霊亜の下僕になんきやいけないのよ!?!」

「別にそんな風に思わなければいいだけじゃ…つてあれ?」

手を見ると魔法陣が点滅し始め、消えそうになっていた

「なんか消えかかっているよこれ？」

「はっ!?!滯さま早く霊亜さんにキスしてください!」

「で、でも…」

「次の万月になれば解除できますから急いで!」

万理亜が急ぐよう急かすもためらっている間に魔法陣が完全に消えてしまった

「あら…消えちった」

「そんなく…」ガク

なぜかすぐくがっかりな万理亜は床に座り込む  
なんとか回避できたと滯が思っていると

「!?」

突然滯の首に首輪のような文様が現れた

「なっ、なに、これ…?」

力が抜けたように座り込んだ滯

「ん? 滯、どつたの?」

心配した霊亜が滯の体に触れた瞬間

「ふああああ!!」

突然呻き出す滯に驚く

「み、滯! どうしたんだ!」

「もう呪いの効果が発動しちゃったんですね!」

「呪い? どういうことなん万理亜ちゃん?」

「主従関係の本来の目的は忠誠心を維持することです。つまり配下が裏切りなどの行為をする呪いが発動する仕組みなんです。おそらくさつきキスをしなかったから呪いが発動したのかと」

状況を分析し、霊亜にことを説明する

「なるほど…一応聞くけど、命に関わることは？」

「それはありません。他の人ならともかく私ほらもう知ってますでしょうがサキユバスですから、この契約に私の魔力を使ったので滯さまはサキユバスの呪いにかかってしまったわけです」

「ほうほう」

「なっ…納得して、ないで…早く助けてよ…」ソワソワ

「こんな状況で冷静に分析をしている二人に滯が突っ込んだ

「ともかくいつまでもこの状態はかわいそうだ。どうやって呪いを解くんのだ？」

「簡単です。服従させればいいんです！」

「どう服従させればいいんだ？」

キョトンとする霊亜に万理亜は滯の近くに近づいて説明する

「滯さまを触ればいいんですよ。今の滯さまは呪いの効果で感覚が引き上げられてるんです。快樂を与えてあげれば落ち着いて自分から忠誠を誓うはずです」

「ちよ、万理亜…!?!」

「もう少しの新防ですよ。いま霊亜さんが楽にしてくれますから、別に滯さまの快樂に堕ちた顔を見たいだなんてこれっぽっちも思ってもませんよ。さあ霊亜さんお願いしま…あれ？」

靈亜にお願いしようとするが靈亜の姿が見当たらない

「靈亜さんどこですか〜？」 キョロキョロ

万理亜があたりを見回し靈亜をさがす

「はあ…はあ…!?」 ムニユ

すると突然、滯の胸が背後からわしずかみにされる

「あつ…ああ〜」

「うん？」

『ダイカイガン！ オレ オメガドライブ！ (意味深)』

「任せてくれ！俺が今、楽にしてやるから」

なんと靈亜はいつの間にか後ろに回っていた

「速!」

これには万理亜もびっくりだった

「やつ、やめなさいよ…100回殺すわよ…っ!」

「やめとけよ。俺に取ってはご褒美にしかならんよ」 ドヤ

「うっ…」

「安心しろ…優しくしてやるから」

靈亜はわしずかみにしている手でゆっくりと滯の胸をわしわししていく

「あん…ああ…ああ〜」

そのまま霊亜は左手を滯の脇に移す

「うっ…うう〜はあああ〜ん!」

「どうやらそこが弱点みたいですよ霊亜さん」

「そうみたいだな…でも。ここだけじゃないんだろ〜?」ハム

「…っ!?!」

そう言いながら霊亜が滯の耳たぶを甘噛みする

それもいやらしく

「(ダメ…ダメだよ。すごく…きもち、いい…このままじゃ。お兄ちゃん…お兄ちゃんお兄ちゃん!!)」

◆?◆?◆?◆?

「やりすぎてもうたなw」

「本当、見かけ以上に肉食系ですね」

あの後、滯はくたくたになるまで快樂に溺れ、ソファで体を休めていた

「あはは…て言うかき、万理亜ちゃん」

「はい？」

「今さらなんだが。この主従契約、しなくてもアイコン見つけたらケータイとかで連絡とればいいんじゃない？」

その言葉を聞いた瞬間、ギクつと言わんばかりに体を振るわせる万理亜

「けっ携帯なんていつ使えなくなるかもわかりませんからこつちのほうが確実ですよ明らか！！」

「まあ別にいいけど…万理亜ちゃん」

「はい？」

「背後にご注意を…」

霊亜がそう言った瞬間、万理亜の頭がわしずかまれる

背後には鬼の如き形相の滯がいた

「万理亜…ちよつと話しがあるの」ゴゴゴゴゴ

「ひええ〜滯さま頭が！頭が割れそうです〜！！別にわざとじゃないんです！いたいですいたいです！割れます〜！！」

万理亜の叫びが家中に響き渡った

「<sup>ズ</sup>愁傷様」

靈亜は連れてかれた万里亜に黙禱を捧げるのだった



## 第6話 滯たちに何かしでかすなら容赦はしない

万理亜の策にはまり霊亜と滯は主従契約により主従関係へとなってしまいサキユバスの呪いをかけられ、快楽に溺らされた日から次の日の朝

何はともあれ霊亜は滯が通う学校に転入するため制服に着替え、学校に万理亜も含め3人で向かっていた

「あく滯の制服姿いいね〜これから滯と同じ学校に行けるなんて俺は幸せ者なんだろう〜」

「何言ってるのよあんたは…」

「霊亜さんらしいですね」

霊亜に滯と万理亜は呆れていた

そんなこんなで学校についた霊亜と滯

万理亜はあの見た目でも成人なので学校に通う必要がないため二人を送り届けたあとには家に戻っていった

「なにも夏休みあけに転校しなくても」

「俺は1分1秒でも滯と一緒にいたいので」ドヤ

「あっ…そう」

そんなこんなで学校についた二人

「いい霊亜。くれぐれも同居してるっていうことばらさないでね」

「ああわかった」

◆? ◆? ◆?

「てなわけで今日から世話になる濡の兄貴の東城霊亜だ。妹に近づく男は容赦しないんでよろしく!」

「言ったそばからばらしてんじゃないわよ!」

「痛て!」

転入先のクラスで堂々と約束を破った霊亜に濡が制裁を加えた

そんな時だった

ガタツ

1人の女性が立ち上がったうえに自分を見て驚いていた

「…れいあ?」

「…えっ?」

女生の顔ををまじまじと見てみるとその子は靈亜のよく知る人物だった

「まつ、まさか……ゆっ柚希!？」

そう、彼女は靈亜と同じ里の出身であり靈亜にとっては幼馴染の野中柚希のなかゆきだった  
靈亜が驚く中、クラスの視線も気にせず柚希が靈亜に抱きついてきた

「おっ、おい柚希!？」

「靈亜……会いたかった」

「……おっ、俺は」

「靈亜?！」

何年ぶりの再会のため、柚希はしばらく離してくれなかった

さらにその光景を見た滯は自分では気づいていないが

内心、嫉妬のような感覚に襲われたのだった

◆? ◆? ◆?

「さ〜とと。飯だ飯だ〜」

時刻はお昼を回っていた

「よ〜し昼休みだー! 滯〜♪」ふん。私なんかより、再会した幼馴染さんと一緒にいれば

いいじゃない」ちよ、滯!」

怒っている様子の滯は靈亜にそう告げると自分の友人たちをつれて行ってしまった

ティラリ〜ン♪ティラリラリ〜ラ〜ン♪

「……そつ、そんな」ガクツ

靈亜は滯と学校で一緒に食事したいと思っていたため滯の冷たい態度はとても答え  
た

「滯、待つてくれ! 違うんだ滯〜!!」涙目

絶望したような顔で滯の名をつぶやく靈亜だった

「大丈夫か〜転校生」

その時、1人の男が声をかけてきた

「うう…」泣

「おいおい。泣くほどのことか?」

「おめにふあわかにふはおふえのひもふいふあ〜（お前にはわかんねえよ俺の気持ちがあ  
〜）」

「なつ、何言つてんだかわかんないけど落ち着けよ」

もはやまともに言葉を喋れないほど靈亜は狂っていた

「成瀬さんを妹つて言つてたから思つたけど。お前…シスコンか?」

「うお〜みふお〜（うお〜滞〜）」

誰がどう見てもその通りだった

「とりあえずさ、よかつたら一緒に飯食おうぜ。あと俺、滝川。よろしくな」

◆?◆?◆?

滝川が校内の屋上のドアの鍵を簡単に開けて

現在、屋上で食事中（と言っても実際食べてるのは滝川のみ）

「しかしお前大した肝だな。学園が誇るアイドルである滞姫と柚稀姫。その二人とフラグたてて全学年敵に回してんに堂々としてるとはな」

「関係ねえよ、俺は俺のやりたいようにやるだけだ。滞と素敵な学園ライフをおくれりやそれでいいさ〜」

「おいおい柚稀姫はいいのかい？幼馴染なんだろう？」

「……柚稀には迷惑かけてばつかだし、勝手に居なくなつちまった俺が今さらどう接すれば」

かつての出来事のせいで素直に柚稀と向き合えないことを悔やんでいた

「気にすることないんじゃないか？何があつたか知らないけど少なくともそう思うぜ

？」

「…ありがとな。やっぱ“魔族”でもいいやつはいいやつだな  
!？」

霊亜の言葉に滝川は驚く

「なっ、なんのことだ？」

「とぼけなくたっていいよわかってっから」

その瞬間、滝川は霊亜から距離をとる

「…お前、どうして？」

「俺、わかっちゃまうんだよ魔族とかの気配やら何やらな。どうせ濡の監視役かなんかだろ？」

あっさり正体を見抜いたにも関わらず霊亜は相変わらずだらけきっていた

「何突っ立てんだよ？早く食わねえと次の授業遅れんדר？」

「お前なんでそんな余裕そうな顔してんだよ？俺はお前の言うとおりの現魔王派の魔族で監視役なんだぞ？正体を知られたからには今ここでお前を消すこともしかねないんだぞて？」

そう言うのと魔力を湧き出させ構える滝川だったが

「……やれるもんならやって見やがれ」ギロ

「!？」

さつきの不ぎけた態度とは裏腹に、しかも自分と互角かそれ以上の魔力を湧き出させる霊亜に息をのむ

すると霊亜は魔力を引っ込めまた不ぎけた態度で接する

「安心しろ。お前が濡たちに何かしでかすなら容赦はしないが、それ以外は上司に報告とか俺をどうこうする作戦をたてるとか好きにしてくれていいさ」

「…ふっ、あはははははははははwwwなんなんだよお前おもしろすぎwwwお前みたいなやつは見たことがないよ、あゝ腹痛いwww」

霊亜の態度に笑いだす滝川

「はく…わかったよ。今のところは何もしない。ただし俺とて魔王派の者だ。転んでも只じゃ起きないぜ」

「好きにしろ。だがこれだけは覚えとけ…濡や万里亜ちゃん。柚稀に危害を加えたらただじゃ済まさない」

互いにお互いを睨む二人

その時、チャイムがなる

「さて、戻るとすつか〜」

霊亜はめんどくさそうな態度のまま立ち上がり滝川の横を通り過ぎた

滝川は自分を横切った霊亜を見つめる

「お〜い滝川。いつまで突っ立てんだよ。いくぞ?」

「…ああわかったよれいっち」

霊亜の呼びかけに答えて教室にもどる滝川は内心思っていた

「(東城霊亜か…面白いやつと出会ったもんだぜ)」

◆? ◆? ◆?

「……」

「なっ、なあ〜滯。まだ怒ってんの?」

「話しかけないでよ」 プン

「怒るなって、俺だってびっくりしたんだよ〜」 アセアセ

なんとか大好きな滯の機嫌を直そうとあれこれやる霊亜だが、一向に滯は機嫌を直してはくれない

困り果てていた時だった

「お〜い滯さま〜霊亜さま〜ん!」

向こう側でこちらに手をふる万里亜の姿があつた



「お勤めご苦労様でした…ってあれ？なんかお二人共険悪なムードですね？」

「べつにそんなんじゃないわよ」

「滞々」アセアセ

「なんだかよくわかりませんが、今はそれよりもお二人共に見せたいものがあるんですよ…じゃじゃ〜ん!!」

そう言うところ万里亜が取り出したのはなにかの装置だった

「なによそれ？」

「よくぞ聞いてくれました。実はこの万里亜、前回の経験を活かしてアイコンやユルセンさんを頼ることなく眼魔を目視できるものを作れないかと考え、ついにそれを完成させたのがこの液体です！これをこの機械にセットして吹きかければ眼魔を見つけ出せるというわけですよ！」

「すつ、すごい…じゃあこれがあれば？」

「そうです！戦いに多いに役立つわけです！」ドヤ

誇らしげに言う万里亜だった

「すごいじゃない万里亜…でも、よく作れたわねこんなの」

「あゝいえ、それが。これ殆どは私が作ったんですけどどうにもひと手間足りなくて悩んでいた時、変なおじいさんが現れてこの液体を作るアイテムをくれたんです」

「変なおじいさん？」

万里亜の言っていることに濡は小首を傾げる

「それ多分おつちゃんだな」

「おつちゃん？」

「あつ、やっぱりあの人霊亜さんの知り合いなんですね」

「まあな。詳しいことは帰ってからにしようぜ」

そう言つて濡たちを連れて帰ろうとした時

「霊亜」

自分を呼び止める声が

「…柚稀」

そう、幼馴染の柚稀だった

「大事な話があるの…二人だけで」

「うん？」

彼女は霊亜にそう告げるのだった

## 第7話 家族を見捨てるようなマネはできないね

同じ勇者の里の出身であり、転入した学園では瀧同様に姫と称される

幼馴染である柚稀と再会した霊亜は転入初日後、帰ろうとした直後、彼女に呼び止められ

そのまま彼女に連れられてファーストフードの店に

「…なあ柚稀、別に並んで座らんでもよくね？」

「ダメ、重要な話なの。他の人に聞かれたくない」

そう言つて霊亜に自分の体を密着させる

「ありがとう来てくれて」

「ゆっ柚稀…？」

「…会えてとつても嬉しい」

「……もう、5年も経つんだっけな。速いもんだな時が経つのは」

霊亜は脱力感に苛まれるかのような元気のない返事を返す

「柚稀も随分変わったな」

「霊亜こそ…前は私が抱きついたら霊亜もぎゅって抱きしめ返してくれた」

「…そう、だったな」

「…どさくさにお尻も触った」

柚稀の一言に霊亜が体をびくつかせる

「でも今の霊亜はあの頃と違う」

「柚稀？」

「霊亜、私を避けてる」

「!？」

確かに柚稀の言っていることは当たっていた

自分は無意識に彼女を避けていたかも知れないと霊亜も内心は気づいていた

「やっぱりまだ気にしてるの？5年前のこと」

「……ああ」

霊亜は悔しさから持っていたグラスのコップを握り締める

「ちがう、あれは霊亜のせいじゃない。霊亜が責任を感じる必要はない」

「いや、俺のせいだ。俺がお前に…これをプレゼントしたばかりにお前たちを危険な目に合わせた上に里をあんなことにさせちまった」グヌヌ

オレゴーストアイコンを握り締めながら霊亜はつぶやく

「絶対ちやうもん。だって霊亜がいなかったらうちら今頃死どった」

「…」

「靈亜のおかげでうちらは今こうして生きていられる…」

「…柚稀」

すると柚稀はさらに靈亜に密着し、頭を靈亜の肩におく

「でもそのせいで靈亜はこんな体になってしまった。うちのせいで靈亜は一度"死んでしまった"」

「お前が気にする必要はない。俺は守りたいから守ろうとしてこうなったんだ。後悔はしてないよ」

「でも…」

「心配すんなって。俺はいずれ生き返るんだからさ。余計なことは考えず、お前はお前でいてくれ」ニコ

そう言つて靈亜は後悔で体を振るわせる柚稀の頭を優しく撫でた

柚稀は靈亜がこうしてくれたことが嬉しかった

自分が知っている優しい靈亜のままであることが

しかし、そんな靈亜だからこそ柚稀は伝えねばならぬと思った

そうして柚稀は口を開く

「靈亜。お願いがあるの」

「お願い？」

「…これ以上、成瀬滯と関わらないで」キリ

そう、彼女は霊亜に告げるのだった



「まさか滯さまのクラスメイトが勇者の一族だったなんて」

「…私、バカだったわ」

「仕方ありませんよ。簡単に気づかれるような人を監視役に選ぶ人なんていませんでしょうし」

落ち込んでいる滯を万里亜がフォローしようとする

「そうじゃないの、霊亜の幼馴染っていう時点で気づくはずなのに…あの子が霊亜に抱きついてきた時、私。気が動転してて気づかなかった」

「まあ、向こうから攻めて来ない限りは大丈夫でしょう。ただでさえ悪魔の刺客たちや眼魔の相手で精一杯なのに。勇者の一族を相手にしてる余裕なんてありませんよ」

万里亜はそう言うとジュースをストローでチューチュー吸う

「(でも、私が思ってるのはそうじゃない。私は…!?)」

その時、滯の首元に呪いの文様が浮かび上がる

「どうしました滯さま?」

「なっ、なんでもないわ!」

「そう…ですか?」

万里亜は心配そうな顔をするも滯の言葉を聞いて再び視線をそらす

「(違うの…これは覗きじゃない! 私は霊亜の身を案じてるだけ…この程度で呪いが発動するなんて)」

呪いの影響で体をもじもじさせていると

「嫌だね」

霊亜たちの席から霊亜のその一言が聞こえた

「…れい、あ?」



「…これ以上、成瀬滯と関わらないで」キリ

「嫌だね」

「どうして…?」

柚稀は霊亜の反応に驚く柚稀

「いくら柚稀の頼みでも聞けない相談だ。滯と万里亜ちゃんは俺の家族だ。家族を見捨てるようなマネはできないね」

「…霊亜」

「滯は誰かさん達のくだらない考えのせいで両親を奪われたばかりか自身も狙われている。でもあいつはなんの罪もない1人の女の子なんだ。だからこそ俺はあいつを守る。俺が…妹であるあいつを守る。それが今の俺のすべきことだ」

そう思う霊亜の目には一切の曇りもなかった

「もし里のみんなも滯の命を狙うつもりなら俺は戦う…例えば本当に里を裏切ることになっても」

「…本気なの?」

「ああ…滯を守るのは俺の約目だから」

「霊亜」

霊亜の覚悟に揺れる思いの柚稀だった

そんな時

「お客様!お釣りが!」

店員の呼び止めも聞かずに去っていった滯の姿を微かに目視した



「滞り？」



「滞りさ、滞りさ、待ってくださーい！」

逃げるように去っていった滞りを追いかけていた万里亜は何度も彼女に呼びかける  
そして止まったところでやつと追いついた

「…ねえ万里亜。どうしよう」

「ふえ？」

「…もう、靈亜とどう接していいかわかんないよ!!どうして…どうして靈亜は自分の故郷の人たちを敵に回してまでも私を守ろうとするの?…どうして」涙

「いいことじゃないですか。靈亜さんが本当に私たちを大切にしてくれてるってわかったんですから」

靈亜の優しさを、さらに思い知った滞りは自分の気持ちに戸惑う

「靈亜さんが私たちを信じてくれるなら私たちも靈亜さんを心から信じてあげればいいだけの話ですよ」

「そっそれだけでいいの?」

「後はそうですね〜…漣さまが霊亜さんになにかしてあげたいなら、それをしてあげればいいだけのことです」ニコ



会計を済まし、漣を追おうとする霊亜だったが

「霊亜まって!」

「…離してくれ柚稀、漣が」

「まだ話は終わってない」

そんな彼を柚稀が止める

「なんと言っても無駄だ。俺の意思は変わらないぞ」

「やっぱり霊亜だけで成瀬漣を守りながら戦って勝てるとは思えない」

「言ってくれるねえ」

「魔族だけじゃなく里まで相手にするなら尚更」

互いに一步もひけない二人は言い争いを続ける

「…なあ柚稀」

「なに?」

「逆はできないのか?」

「逆?」

霊亜の言っていることが理解できず柚稀は小首を傾げる

「お前がこのまま監視役として滯を見つけていれば里と対立、もといお前たちと戦う必要はなくなる。このままにもなく平和に過ごせれば「それは無理」!?!」

柚稀はそう言い放つと周囲が異様な雰囲気となり柚稀は両腕を魔力で武装し、腰の刀で背後に迫るはぐれ悪魔を切り裂いた

だが、それを合図にと言わんばかりあたりには無数のはぐれ悪魔たちが現れた

「霊亜さがつて、ここは私が「馬鹿言ってるんじゃないやねえよ」霊亜?」

「お前を一人で戦わせるなんざ俺がさせるかよ」

そう言うのと霊亜はドライバーを出現させアイコンのスイッチを押す、そしてドライバーにアイコンをセツトする

『バツチリミナー! バツチリミナー!』

ドライバーからオレパーカーゴーストが現れた

「変身!」

『カイガン! オレ! レッツゴー・覚悟! ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!』

オレパーカーゴーストが霊亜に覆い被さると変身を完了する

「これは?」

柚稀は霊亜の変化に驚いた

「さあ、魂、燃やすぜ！」

ガンガンセイバーを手に霊亜がはぐれ悪魔たちを切り刻んでいく、柚稀もそれに負けじとはぐれ悪魔たちを切っていく

ビリリリリリリ!!

はぐれ悪魔が魔力の雷を放つ

「わつと、危ねえな！ だったらこれだ！」

怒った霊亜が02と書かれた黄色のアイコンを取り出しスイッチを押すとそれをドライバーにセツトする

するとドライバーから発明家エジソンの魂の化身『エジソンパーカーゴースト』が現れて霊亜の周りを飛び回る

霊亜はそのままドライバーのトリガーを引く

『カイガン！ エジソン！ エレキ！ ひらめき！ 発明王！』

エジソンパーカーゴーストが覆い被さるとともに霊亜はエジソン魂へと変わる

はぐれ悪魔は理解が出来ないまま御構い無しに電撃を浴びせる

だが、電撃はダメージを与えるどころか逆に吸収されていく

ピンポン！

「よし！利用しようこれ」

霊亜はガンガンセイバーをガンモードに変形させる

そしてドライバーの目にガンガンセイバーをかざす

『ダイカイガン！ ガンガンミナー！ガンガンミナー！』

効果音が流れ、霊亜がガンガンセイバーのトリガーを押す

銃口から先ほど吸収した電撃エネルギーをはぐれ悪魔に向ける

「柚稀！伏せろ!!」

「!?」 スツ

『オメガ・シユート!』

柚稀が伏せたのを合図に霊亜が引き金を引くと電撃エネルギーが放たれ一匹のはぐれ悪魔に当たるとそこから電撃が他のはぐれ悪魔にも襲いかかり次の瞬間爆破し、はぐれ悪魔たちはあつという間に消え去った

「うっし！終わりっつと」

消滅を確認し終え、霊亜は変身を柚稀は武装を解いた

「いや〜びつくりしたわ〜」

おちゃらけたような態度でそうつぶやいていると

「霊亜」

「柚稀？」

霊亜の前にたち向かい合う柚稀

「助けてくれたことは嬉しかった。でも私とて里の人間。成瀬瀦の魔王の力に引かれはぐれ悪魔の数も増えてきた…彼女の存在で周囲に危険が及ぶようなら里は成瀬瀦を消滅対象へと切り替える。そうなれば私は容赦しない。例えそれで霊亜に恨まれたとしても」キリ

「…考え直す気はないと？」

「ええ。世界に害をなすものは斬る。それが私たち…そうでしょ？」

柚稀は霊亜に問う

霊亜とて元は里の人間、柚稀の言うことも理解はしている

しかし今回ばかりはそうだとわかっていても引くわけには行かなかった

「なら、俺の答えも、もうわかってんだろ？」

「…そうね」

二人は互いを見つめ合ったあと、柚稀は霊亜に背中を向け歩き出す  
見せるわけにはいかなかったのだ。今の自分のこんなにも辛い顔を

霊亜がああ言った以上、もう止めることはできない、いずれ自分は霊亜と戦わなければならぬ

自分が愛している人に刃を向けねばならないからだ

「柚稀！」

「……なに？」

靈亜の呼ぶ声でなんとか平常心を保たせ靈亜に対峙する

「…悪かったな勝手にいなくなつて。迷惑もかけて」

「えっ？」

「お前らを巻き込まないためとは言えお前の気持ちも考えずに5年もの間、心配をかけてすまなかつた！」

「靈亜」

この時、靈亜は思っていた

この期を逃せば、戦うとなればこの言葉を述べるチャンスはない

だからこそ靈亜は柚稀に対する思いを余すことなく告げた

「…言いたいことは言った。じゃあ俺は行くぜ。またな柚稀」

「…靈亜」

柚稀にそう告げて靈亜は帰る場所へと戻っていくのだった

## 第8話 今まで食べたケーキの中で一番美味そう

はぐれ悪魔たちを撃退した霊亜は家に帰ると濡たちには出来事を一部始終話した  
「つてなことがあつて遅くなつたんだ。ごめんなく心配かけて」

霊亜が申し訳なさそうに頭を下げた

「なるほど、お話はわかりました」

「そっかあくよかつた」とはいえ「…えっ?」

「私たちに不安な思いを味あわせておきながら自分は幼馴染さんといい感じになつて  
ななんて本当にいいご身分ですね。ね〜濡さま」

「そつ、そうね…」

ジド目で霊亜を見た万理亜が濡に同意の呼びかけをすると濡も同意する

「いやいや、俺はただはぐれ悪魔と戦つただけで「いい訳は結構です」!?!」

「私たちは霊亜さんを信じていますのに、そんなことされては不縁になりそうです」

「そつ、そんな〜!?!」

不縁になれば濡たちとも一緒にいられなくなる。それは今の霊亜にとっては死ぬ程、  
いや、死ぬよりも辛いことだった



「たつ、たのむ！嫌いにならないでくれ！いなくならないでくれ！俺ができることなら  
"なんでも"するから！」

「今、靈亜さん"なんでも"つておつしやいましたね〜」ニヤ

その言葉を聞いた瞬間、万理亜はそれを待っていたと言わんばかりに不適に笑う

「ではこれより靈亜さんには私たちとより深い信頼関係を深めてもらいましょう…その  
ためには！」

かぼくん♪

「で、万理亜ちゃん。これはいったい？」

「信頼を深めると言ったら裸のお付き合いが一番ですから」

「あくなるほど。確かに」

「なんで靈亜はそこまで冷静なのかしら？」

普通ならこの状況になれば少しは戸惑うだろうと思っていたのに靈亜は余裕そう  
だった

「何言ってるんだ。可愛い妹たちとお風呂に入れるなんて嬉しいに決まってるじゃん」

「さっすが霊亜さん。話しのわかる人ですね〜…ただぶっちゃけいえば少し恥ずかしそうにしてくれてもよかったですけど」

「ごめんな〜」アハハ

軽いノリで語り合う霊亜たち

「さて〜それでは滯さま。手はず通りに〜」

「うっうん……」テレ

恥ずかしがりながらも霊亜の後ろに来た

その時、滯は柚希のことを思い浮かべる

霊亜と親しそうにしていた時のあのモヤモヤを思い返す

「(野中 柚希には…負けたくない!)」

そう内心つぶやくとスポンジを泡だて霊亜の背中を流すため同じ位置にまでしゃがむ

「じゃ、じゃあ…はじめるわよ」

「おう、お願いしま〜す」

滯が霊亜の体をスポンジでゴシゴシする中

万理亜がなにやら滯に合図を送ると滯は戸惑いつつも身に纏っていたバスタオルを

外し、靈亜に抱きついた

「滯、どうした？なんかいつになく積極的だな」

「うっ、うるさいわね！て言うか動かないでよ。動いたら100殺すわよ」

「じゃあ動こうかな「なんでよ!」だって俺もう死んでるから殺される心配ないし〜」  
痛いところを突かれたと滯は一瞬固まったが直ぐに切り替える

「いいから動いちゃダメ：妹の頼みを聞いて」

「よし！好きにしてくれ！」

滯のいうことを聞き入れた靈亜はおとなしくじつとする

それにより滯も行動を開始する

自分の体をブラシのように上下させて靈亜を洗う

それを見ていた万理亜はよしよしとうなづく

「(恥ずかしい：恥ずかしいけど：でも)」

再び脳裏に浮かぶ靈亜が袖稀と仲良くする妄想

「(二人が仲良くしていると靈亜が離れていくような：いなくなっちゃうような感じがしてならない：ヤダ。そんなのヤダよ)」

焦る滯の気持ちが行動へと表されていく

「ふっふっふ。いい感じになってきましたね。ではプランを2に移行しましょう」

た  
そう言う万理亜は先ほど霊亜が謝罪の意味も込めて買ってきたケーキを持ってき

「さあ霊亜さんケーキをお持ちしました〜！」

「えっ？なぜに？」

「(いんです) うわあ〜滑って転んじやいます〜」 棒読み

「万理亜ちゃん!？」

霊亜は急いで万理亜を抱き抱える

「ありがとうございます霊亜さん」

「いやいやなんのこれし(ヒュウウウウウ) …ん？(ベチャ) …あつ…」

「ふっ…」

しかし滑った際に放り投げたケーキが霊亜の顔に落つこちてしまった

「ぶへっ?!ぶふあ!?!…うわ〜べとべとだよ」

ケーキが顔や腕についてしまった

霊亜がシャワーで洗い流そうとすると

「いけません霊亜さん!せっかく霊亜さんが買ってきてくれたケーキなんですから…美

味しく頂かないと」ペロリ

「ちよ万理亜ちゃん。くすぐりたいよ」ソワソワ

「我慢してください。すぐ住みますから。ほら濡さまもいかがです?」  
「…濡?」

濡の方に目を向けるとそこには呪いが発動してソワソワする濡が

「…おいで濡。舐めたいなら舐めていいんだぜ」

そう言うときクリームをついた左手を差し出す

「……あむっ!」

たまらず濡が指先についたクリームを甘噛みすると手首、腕と徐々に上がっていく

「ふう〜…ご馳走様です」

「はあ…はあ…」ソワソワ

霊亜についたクリームを舐め尽くした二人。だが、まだ濡の呪いは溶けてはいなかった

「……」スツ

「うん? 霊亜さん?」

突然立ち上がると霊亜は風呂場から出ていき、少しすると戻ってきた

そして霊亜の手には先ほどと同じ2つのケーキが

「えっと? 霊亜さんこれはいったい?」

「わ〜滑って転んじやった〜」棒読み

「えっ?」

先ほど万理亜がしたのと同じことをして滑って転び手にしていたケーキを放り投げた

そして放り投げたケーキが濡たちにかかる

「ちよっ? 靈亜さん?」

「なっ、なにを…するの?」

「なにつて…二人だけずるいからさ」 黒笑み

そう言うところクリームまみれの2人を眺めてニヤニヤしていた

「まあ、そんなわけでとりあえず2人とも、お互いに舐め合ってくれ」

「ちよ!?! なっ、なに考えてんのよあんたは!?!」

「いやー本当なら俺がやってやりたいんだけど、俺飯食えないからは、今までのケーキの中で一番美味そうだけどな…だから頼む。俺の代わりに味わってくれ」

靈亜が2人にそう願ひ出る

「で、でも…」

「濡さま。こゝは靈亜さんの思いに応えてあげましょう」

確かに靈亜は死んでいるがために自分たちのように物を食べる喜びを感じられない

何より、靈亜にはいつも助けられてばかりで自分はなに一つしてあげられない

こんなことでも靈亜の役にたてるならと戸惑いながらも滯は承諾し、万理亜とお互いの体についたケーキを舐め合う

「みつ滯さま〜」

「……あうん！」

滯が舐められる度に喘ぎ声をだす

「あん！……まつ、万理亜くすぐったい／＼／＼」

「滯さま、最後のケーキまで舐め終えるまでの辛抱です」

万理亜が説得し、恥ずかしながらも続けた

「2人とも可愛いすぎ」ジユルリ

そんな2人を靈亜がいやらしい目で見つめていた

「はうん！」

その後も二人は体についたケーキを舐め尽くし、力尽きてその場に倒れたのだった

「はあ…はあ…おっ…お兄ちゃん」

「れっ…れいあさん」

「ご馳走様でした！」

こうして信頼関係を深める作戦は予想以上の結果に終わったのだった

その後、いつもの就寝時間となり皆それぞれ寝静まる中、靈亜だけは寝付けずにいた  
靈亜は自分の体のことを考えていた

早く生き返るためにはあと1個のアイコンを手に入れなければならない

生き返れたならば本当の意味で溜たちと家族として幸せな日々をおくれのだから

「はあ…はやくアイコンを手に入れないと…」



『そんな簡単に行くか馬鹿者が』

「!?」

部屋に響く年老いた男の声が

「その声っておっちゃん!?どこだおっちゃん!」

「ここだよ〜ん」

「うわっ!?」

いつの間にか勉強机の椅子に座っている老人が

「で、おっちゃんが俺の前に来てことはアイコンの情報か!」

「まあ、そんなところだ。心してきけ。鳴かぬなら、殺してしまえホトトギス」

「それってことは…次は織田信長か!!」

「そういうことだ。しかし気を抜くなよ。いつもいつもうまくいくとは限らんからな」

仙人が霊亜に注意を促す

「たとえ何があろうと俺は絶対生き返る。そうすれば濡たちと真の意味で家族として暮らせる。幽霊としてでなく、生身の肉体で、この手であいつを抱きしめてやりたいんだ」

「そうか…ならば頑張ることだな」

そう言うのと仙人はすうっと消えていった

「絶対に15個のアイコンを手に入れてみせるぜ!」

そう霊亜は決意を込めるのだった

## 第9話 わかった。協力してやるよ

とある日の朝、霊亜たちはいつものように学校に登校中だった

「ふあ〜」

「滞眠いのか？大丈夫か？」

「昨日徹夜で宿題をやっててたからね」

眼をこすりながら滞はそう言った

「滞は熱心だな。感心するよ」

「だったら少しは勉強したら？」

「いいよ別に、勉強なんかしてたら滞との時間が削られちゃうじゃん。俺は滞と楽しい日々が過ごせりゃそれで満足なんだ」

「…馬鹿」ボソッ

霊亜の言葉に照れくささを感じ、ボソリとつぶやく滞だった

そんな時だった

「霊亜の兄貴iiiiiii!!!」

「うん？」

「あつ、あいつらは!？」

背後から自分の名を呼ばれて霊亜が振り向くと以前、濡をナンパした不良たちのうちの1人だった

それを見た濡が霊亜の後ろに隠れる

「兄貴、探しやしたぜ」ハアハア

「お前、駒村組の?…どうしたんだそんなに慌てて?」

「…うあああくん!お願います助けてください!!」

「なつなんだってんだ!？」

いきなり泣きつかれて困惑する霊亜と濡だった

「なんだって?駒村が?」

「駒村って人ってたしか霊亜の知り合いだったわね」

「はい、駒村さんは俺らの憧れの存在で、俺たちみたいなやつらに分け隔てなく接してくれて人望も厚い人なんすけど…数日前からまるで人が変わったかのように横暴で冷たい人になってしまつて」

彼の話によると最近。他校に赴き、そここの不良たちに自分の配下になるように言つて

きては拒否したグループを自分たちを引き連れて襲撃して完膚なきまでに痛めつけるのである

そうしてどんどんとその強引なやり方で他のグループを配下に収めて言ってるのである

もちろんそのやり方よしと言えるはずもなく何人かの仲間が駒村にやめるように説得したが

それにより怒りをかっただものは数日感の間にまわりで不思議な現象がおきて事故に巻き込まれたりなどして入院するほどの怪我を負ったとのこと

「あの駒村がそんなことを…」

少なくとも霊亜が知ってる駒村はそんなやつではなかった

不良ではあるものの他の不良たちにいちやもんをつけられた小さい子を助けてあげたり、部下を傷つけた奴は許さないというほど仲間思いのやつだった

「きつとあの男のせいだ。あの男が駒村さんを変えちまったんだ!!」

「あの男?」

「最近じまたで噂になってるんですが、願いを叶える方法を教えてくれる男つてのがいて。偶然にも駒村さんが会ったらしいんですよこの騒動が始まったのは…だからきつとあいつの仕業に違いないっす!」

「まあまあ落ちつきなさいよ」

興奮した不良を濻がなだめる

「お願いします！どうか兄貴の力で駒村さんをもとに戻してください!!」

土下座してお願いをする不良を見た霊亜が頬をポリポリかく

「どうするの霊亜？」

「……わかった。協力してやるよ」

「まじっすか!?!ありがとうございます!!」

万理亜とも合流し、不良に連れられて駒村組のアジトにやってきた霊亜たち  
すると

「話になんねえよ!!」

いきなり怒鳴り声をあげて他校の不良グループのリーダーが不機嫌そうな態度で出ていった

「もしかしてさっきの話にあった？」

「へい、おそらくはまた傘下に入るよういったんでしょね…」

そう言うくと不良が駒村のところに霊亜たちを案内する

「失礼しやす駒村さん」

「ああ?…何だテメエか。なんのようだ?」

「あついえ、今日は駒村さんにお客様です」

不良はそう言うくと駒村に霊亜たちを会わせる

「おお!霊亜じゃねえか元氣そうだな」

「お前もな。…ところでさ、さっきのなんなの?」

「ああ、俺の部下になれって言ったらキレやがってな「お前の傘下に加わるなんざごめん  
だ」だとさ」

若干イライラしながら駒村はそういった

「だがいいさ、俺はいずれ天下をとるんだ。織田信長のようにな」

「信長?」

「おうよ。信長は俺の憧れなんだ…」

憧れてるといふ駒村の表情を見ているだけならとても強引なやり方で不良たちを傘下に入れようとしては思えなかった

「そんな時。ある男からこいつをもらってな」

そう言うくと駒村はあるものを取り出す

それはかなり年代が立っており、男曰く信長が羽織っていたとされるマントだそうだが「こいつを持つてると信長になった気になれるんだ：俺は信長のようになる！野望を邪魔する奴は誰だろうと容赦はしない：」さっきのやつ”も含めてな」

駒村がそう言った時だった

ドンガラガツシャーーン!!

「!!!?!」

向こうの方からものすごい音が聞こえた

「ほくら、きつと俺に逆らったから天罰がくだったんだ。あは、あははははははは!」

「俺見てくる!!」

「霊亜!」

「待つてください!」

「ここらへんのはず…あつ!」

霊亜が行ってみるとそこには先ほど駒村の申し出を断った他校の不良グループの



リーダーが倒れてきた鉄骨などにより怪我をしている光景だった

「いつ、いてえよ〜」

「おい、大丈夫か？しつかりしろ」

「あははは〜。イエ〜イ。大成功〜♪」

「やっぱり眼魔の仕業か」

駆け寄ると男のとなりから道化師のような格好をした眼魔が現れた

霊亜はドライバーを出現させるとアイコンのスイッチを押す

『アーイ バッチリミナー！バッチリミナー！』

トリガーを引きベルトが瞬く

『カイガン！ オレ！ レッツゴー・覚悟！ ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！』

トランジェント姿に変わりオレパーカーゴーストを羽織りゴーストへと変身する

そしてガンガンセイバーを構えて眼魔に向かっていく

「はああああ!!」

「うん？おわつと〜?!危ないじゃないか!!」

霊亜と眼魔が激しい攻防を繰り広げる

「ほらこつちこつち〜」

「くそっ!」

だが、さすが道化師と言わんばかりにトリツキーな動きで攻撃をかわしてくため戦闘のペースを崩されていく

「今度はこつちだくらえ、ぼおおおん」

「うわっ!？」

両手から光弾のようなものを撃ってきたのでそれをかわす

「やってくれたなこんにやろめ!!」

おかえしと言わんばかりに霊亜が剣を振るう

「ぐへえ!!」

剣先にあたって倒れ込む眼魔に剣を振り落とすも

「死ぬう〜!」

とかいいつつ二人に分裂してそれをかわした

「えっ? 増えた!？」

「はっは〜二倍〜にば〜い♪」

そう言うのと今度は二人がかりで襲いかかってきた

一体でも厄介なのに増えたことで更にやりづらくなつた

「フアイト〜」

「一発!!」

「ぐああああ!!」

連続でパンチを喰らい霊亜が転がるように倒れる

その間に眼魔がコントしていた

「あくもう、腹立つぜ」

「なぐにやっつてんだよ」

そこにユルセンが現れた

「ガンガンセイバーを2つに割ってくっつけて薙刀モードだ!」

「…わかったよ」

ユルセンの指示のもとガンガンセイバーを割ってくっつけ薙刀モードに変形させた

7

「やっちやるぜええ!!」

「あん。兄さん危ない!」

「コント中に攻撃とか反則よ〜!」

「やかましい!!」

薙刀のリーチの長さを活かして敵をよそ付けず、次々と攻撃を喰らわす

そして怯んだ隙にベルトにガンガンセイバーをかざす

『ガンガンミナー!ガンガンミナー!』

そして霊亜は構える

「今のうちに」ボソッ

そんな中、内一体がそおっと逃げ出す

それに気づかず目の前の眼魔にむかってガンガンセイバーのトリガーをひく

『オメガストリーム!』

「おらっおらっ、おらあああ!!!」

「もう終わりがかい、さつき出てきた場合やのに〜!!」

そう言うと眼魔が大爆発した

「よし……ってあれ?アイコンがない?」

あたりを探してもアイコンが見当たらない

「……まさか俺が倒したのって……」

十中八九ニセ物だった

「チクシヨーーー!!!魔力が無駄になったああああ!!!」

悔しきで叫びだす霊亜だった

そしてそんな霊亜を遠くからみるゴーストのような姿で青い姿をした存在がいることに霊亜は気づいていないのであった

## 第10話 お前にはお前を慕う仲間がたくさんいる

漣たちと合流し戻ってきた霊亜たち

「わっわかった！お前の配下に加わるから勘弁してくれええ!!」

突然自分たちの横を逃げるように走り去ったのは先程、眼魔に襲われた他の不良グループのリーダーだった

「はあ……これで何件目になるのやら……」カキカキ

不良がメモ帳を書いていると万理亜がふと何かに気づいた

「ちよつといいですかそのメモ帳」

「えっ？あつはい。どうぞ」

メモ帳を取り出して今までに書いてある点をペンでなぞってみるとそれは目玉の形をしていた

「霊亜さん、これって？」

「間違いない。眼魔は何かを企んでるな」

そんな時だった

数百キロメートルの範囲が謎の光に包まれた

グラグラグラグラグラグラ!!!

「なっ、なんだ!?!」

「これはいったい?」

「もう始めやがったのか!?!」

そして突然大きな揺れが起こり始めたと思っただら包まれたかしよが徐々に空へと浮き始める

「はははははは!」

「駒村?」

「ボス!?!」

そこに現れたのは信長のマントを手にした駒村だった

「ついに、俺が天下を取る時が来たんだ! あははははは!!」

「駒村、これはいったい?」

「見ろお! ここが俺の城となる。俺の天下統一のための拠点となるのさ!!」

両手を広げながら浮き上がるこの場合から駒村が下を見下ろす

「ボス！やめてください。こんなのボスらしくないっすよ!？」

「これが本当の俺さ。俺は信長になるんだああ!!」オーラ

『いいぞ。もう少し、もう少しだあ』

その様子を見ていた眼魔が現れた

「眼魔！」

「そこにいるんですね！てりやああ！」

以前開発した新兵器から特殊な液体を散布する

すると透明だった眼魔の姿が霊亜達以外の視界にも映った

「あれっ？バレーテラ」

「なっ、ばっ化物!？」

「眼魔、あんたたちの好きにはさせないわよ！」

「へへくん、今更なにをしてもむっただだよくん」

そう言うくと眼魔は駒村に近づくと

「さあ。いよいよだよ。これよりお前は信長として世界に君臨するのさ」

「俺が…」

「そうだ。お前こそこの世界を支配するにふさわしい」

「そうだ。俺は選ばれし人間なんだ。俺は織田信長になるうう!!」オーラ



眼魔の言葉に耳を傾け、自身が信長になると言った瞬間全身から怪しい光を放つ

「いかん！」

「どうしたの霊亜？」

「このままじゃ、駒村がゴーストを生み出す。そうなったら駒村が死んじゃう！」

「なんですって!!？」

霊亜の口から聞かされたその内容に全員が驚く

「やめろ駒村！このままじゃお前死んじゃうぞ!!」

「信長になれるなら命なんて惜しくねえよ！」

自らの命さえも投げ出すと駒村は言い出す

「ボス！やめてください!!ボスに死なれたら俺たちどうしたらいいかわかんないっす

!!」

「っ?」

「耳を貸すな。お前は信長になるんだ」

自分のために心から泣いてくれる部下の顔を見た駒村の心が揺れ動くも

それをさせじと眼魔が誘惑を続ける

その間にも徐々に駒村の体とマントから放たれる光が強くなっていく

「あははは〜もう何をしても終わりさ〜」

「そうはさせるか!」

霊亜は駒村を抱きしめる

「れっ、霊亜…?」

「駒村、お前にはお前を慕う仲間がたくさんいる。それなのにお前はそいつらをおいて行っちゃうのか?」

「俺は…俺は…」

「あつ、貴様!!」霊亜の邪魔はさせないわ!」なにい!?!」

駒村を救わせるため、霊亜を邪魔しようとする眼魔の前に濤と万理亜が立ちはだかる  
そしてついに駒村から光が消えた

同時にマントからも光が消えた

「しまった!?!」

「…俺は?」

「ボスウウウ〜」ナキ

霊亜のおかげでもとに戻った駒村のもとに部下が駆け寄る

「駒村、信長は怖い武将だと思われているが、本当は身分の上下に関係なく仲間を大切にしていたんだ。仲間を大切にしていたお前のやり方こそ、まさに信長そのものさ!」

「俺が…」

「そうっすよ。だからこそ俺たちはボスについていくんすよ!!」  
「みんな…すまねえ!!」

自分の今までのことを悔やみ頭を下げた

その際に今度は綺麗な光が駒村の体を包む

「あれは!」

「よくも邪魔してくれたな。遊びの時間は終わりだ!!」

「…まずはこっちだな!」

ドライバーを展開し、今回はオレゴーストアイコンではなく緑色のアイコンを手にする

『ア—イ! バツチリミナー! バツチリミナー!』

セットした瞬間現れたのは弓の名手にして誇り高き義賊「ロビン・フード」の魂を宿したロビンフードパーカーゴーストだった

「変身!!」

『カイガン! ロビンフード! ハロー! アロー! 森で会おう!』

ロビンフードパーカーゴーストが覆いかぶさり霊亜はロビンフード魂に変身した  
ガンガンセイバーを手にする

ピイイイイイ〜!

そこにゴーストガジェットであり、電話機にもなるコンドルデンワールがかけつけガンガンセイバーと合体しアローモードへ変形させた

「おらー!」

「そんなもんあつたりませ〜ん!」

「なつ、この!!」

狙いを定めようにもちよこまか動く眼魔になかなか狙いが定まらない

「このこの〜!」

「うっさい!」 ベシッ

「ありや〜!?!」

眼魔を蹴り飛ばした霊亜はすかさず矢を放つも

それを分身を生み出し盾にして攻撃を防ぐ

「またこれか!?!うらあ!!」

霊亜は襲いかかってくる分身体を蹴散らしていく

さらに連続で矢を放ち分身を消滅させていく

「もう怒ったぞ〜!!」

眼魔がまた分裂し、霊亜の周りをぐるりと囲む

その際、霊亜はドライバーにガンガンセイバーをかざす

『ダイカイガン！ ガンガンミナー！ガンガンミナー！』

ゆつくりと弓を構えると今度はドライバーのトリガーもひく

『ダイカイガン！ ロビンフッド！オメガドライブ！』

すると霊亜もまた分身し、そのままガンガンセイバーのトリガーをひく

『オメガストライク!!』

エネルギーを纏い、放たれた矢は眼魔を突き刺す

「これまたナイスショットでえええ!!!」

断末魔とともに眼魔が爆発した

そして足元にアイコンが転がってきた

「よしー！」

「やったー！」

「やりましたね霊亜さん！」

霊亜のもとに溻たちが駆け寄ってきた

だが、喜ぶのも束の間

グララララララララララ!!

「なっなに!？」

「大変ですこれ落ちてます!!」

「浮かせてる眼魔を倒したから!？」

「俺に任せろ!!」

霊亜は島から飛び降りた

「ユルセン!!」

「なんか用か?？」

呼ばれてユルセンが現れた

「ニユートンアイコン貸せ!お前もってたる!？」

「えく?どうしよっかな?」

「んなこと言つてねえで貸せ!!」

「おいちよ、やめろつて…あひやひやひやひやひやひやwwwくすぐてえつてwww!」

霊亜はお構いなしにユルセンからニユートンアイコンを借りるとそれをセットする

『アーイ! バッチリミナー! バッチリミナー!』

ベルトからニユートンパーカーゴーストが現れた

霊亜はそのままトリガーをひく

『カイガン！ ニュートン！ リンゴが落下！ 引き寄せまっか！』

地面に着地すると斥力の能力をもつ右手を浮かぶ島に向ける

『ダイカイガン！ ニュートン！ オメガドライブ！』

斥力のちからで落下の威力を抑えていく

そして島はもとの場所へと戻った

「やりましたよ滞さま」

「あれっ？ でも霊亜はどうなっちゃったの？」

「……はっ、まさか島の下敷きに!?!」

「そっそんな……れっ霊亜あああ!?!」

あわてふためく滞たちだが

「どうした？ そんなに慌てて？」

「きやあああああ!?!」

地面から生え出てきたみたいな感じで霊亜がでてきた

「びっくりさせないでよバカアア!!」

「ごめんごめん」

「おい、なんか忘れてないか？」

「忘れてる…あつ、そうだった！」

ユルセンのといで思い出した霊亜は駒村たちの方に向かった

「駒村、これ借りるぞ」

ゴーストが生まれかけているマントに霊亜が目を描く

すると煙の中からノブナガパーカーゴーストが現れた

「よし、こいノブナガ！」

霊亜がノブナガパーカーゴーストのアイコンを手にしようとしたその時

「はっ!!」

「なっ!?!」

突然何者かが襲いかかってきた

「お前は!?!」

自分の姿と告知し、尚且つ色は青く角が二本のライダーが

「スペクター!?!」

「…俺とともに戦え!!」

ノブナガパーカーゴーストはスペクターを選んだのかスペクターのドライバーに吸収されそこからアイコンがでてきた

「ふん」



鼻で靈亜をわらうとスペクターはそこから消えてしまった

「マジかよ…」

「なんなの？」

「なにものなんですかあの青いのは？」

アイコンを取られてしまったただ呆然と立ち尽くす靈亜たちだった

「スペクター…」

「……」

そしてその様子を遠くから見る若者と少し老けた男性がそこにはいた

## 第11話 上目だけの関係、結局は赤の他人でしかない

狂気と化した狛村を救い、ノブナガゴーストを生み出し、力を貸してほしいと頼もうとした時

謎の青いライダーことスペクターがそこに割り込んできた

そしてスペクターは霊亜が怯んでいる隙にノブナガゴーストのアイコンを手に入れ、その場から立ち去っていったのだった

【東城家】

「ちよつと染みますよ」ピタッ

「ぐううくくうう。染みる」

万理亜が霊亜の顔の傷口に消毒液をつけた綿をつけると涙目で痛そうな表情をして  
いた

「本当に大丈夫なの霊亜？」

「ああ、なんとかな。ありがとな瀧」

心配そうな顔を浮かべる瀧に優しく語りかける霊亜だった

「にしてもなんなんですかねあの青いライダーさん」プンスカ

「そうよそうよ。それにいきなり攻撃を仕掛けてきたし」プンスカ

「ああ…」

滯や万理亜たちが怒った顔で話しているのは先日のとある日に事件のことだった  
ことのきっかけは夜に遡る

「よし、ベートーベンのアイコンをゲットしたぜ」

「やったわね靈亜」

「これで後残り10個で靈亜さんは生き返れるんですね！」

「ああ、残りのアイコンも必ず手に入れてみせるぜ」

ベートーベンのアイコンを手に入れ、上機嫌なまま家に帰ろうとする靈亜たち

「……」

しかし、その様子を高い場所から見下ろす影があつた

そして影はしばらく霊垂たちを眺めていたが

少しして手を空へとかざす

「っ?」

「どうしたんですか滯さ……!?!」

ズウウウウウウウー……ン!

「おいおい、これって?」

「人よけの結界みたいね」

「まさか、現魔王派の刺客?それとも眼魔?」

あたりを警戒する霊亜たち

「…！ねえあれ！」

「どうしました滞さま!?!」

滞が何かに気づいてその方を指さす

「…あつ、あいつは！」

指さす場所には高い場所から自分たちを見下ろす一つの人影が

バツ！

ドスウウウン！

「「っ?」」

影はそこから飛び降りて地面に着地し、ゆっくりと立ち上がる

「えっ? ちよつと、あの姿、それにあのベルト…あれつて…?」

「れ、霊亜さんの変身した時の姿とそっくりです!？」

そう、霊亜立ちの前に現れたのは

以前、駒村との一件の時、ノブナガから力を借りようとした時、

突如として現れ、横取りというような形でノブナガパーカーゴーストから力を受け取り、アイコンを持ち去っていったスペクターだった

「なぜここにいるんだスペクター!」

「靈亜さんあの人のこと知ってるんですか？」

「ああ、理由は知らないが、俺と同じでアイコンを集めてる奴さ」

「えっ!？」

「アイコンを集めてる!？」

靈亜からスペクターもまたアイコンを集めてると聞いて濡たちは驚きの表情を浮かべる

「まさかこんなところで再会するとはな」

「それはこっちの台詞だったの。てめえあの時はよくもブナガのアイコン持って行きやがったな！」 プンスカ

「貴様の都合なんか知るか……俺は、俺の願いを叶えるために全てのアイコンを集める



！」ゴゴゴゴゴゴゴゴ

「「っ!?!」」

スペクターから放たれる威圧に滞たちはおろか、霊亜までも震えを感じるほどだった。「ここでお前と会えたのならちようどいい、その手に持っているベーターベンのアイコンと貴様の持つっている残りのアイコンも俺が頂く！」

「なに!?!」

「行くぞー!」

そう言うときスペクターは戦闘態勢に入るとともに霊亜に向かってきた

「霊亜!?!」

「下がってろ二人とも！」カチャ

ベルトを出現させ、オレゴーストアイコンのスイッチを押し

さらにそのオレゴーストアイコンをドライバーに挿入する

『アーイー！ バッチリミナー！ バッチリミナー！ バッチリミナー！』

ドライバーからオレパーカーゴーストが現れ、霊亜の周りをぐるぐる跳回る

そして霊亜がドライバーのレバーを動かし、ゴーストドライバーがまばたきする

『カイガン！ オレ！ レッツゴー・覚悟！ ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！』

トランジェント姿となった霊亜にオレパーカーゴーストが覆いかぶさり

ゴースト・オレ魂へと変身を完了させ、攻めかかるスペクターを迎え撃つ

「はああ！」

「ぐっ!？」

「ていああ!!」

「うわあああっ!？」

スペクターは怒濤の攻撃を仕掛け、霊亜に連続攻撃をお見舞いし

霊亜は防戦一方のまま吹き飛ばされた

「霊亜！」

「霊亜さん！」

「ぐっ…っ！ 滞、万理亜ちゃん！来ちゃダメだ。危ないから離れてろ！」

危機を感じた滞たちが駆けつけようとするも

2人を危険にさらすまいと霊亜がそれを拒む

「よそ見をしてる暇があるのか！」

「ぐっ!?!」

しかし、2人の身を守ろうとする霊亜にスペクターは容赦のない攻撃を仕掛ける

「せええい!!」

「ぐあああああ!!!」

ストレートパンチがヒットし、霊亜は地面を転がるように倒れた

「つち、この野郎。もう頭きた!!」

霊亜はやられっぱなしじゃないと言わんばかりに別のアイコンを取り出し、スイッチを押す

そしてドライバーに装填する

『バッチリミナー！ バッチリミナー！』

するとドライバーからムサシパーカーゴーストが現れ

霊亜の周りをくるくると回る

そして霊亜はトリガーを引き、ドライバーが瞬く

『カイガン！ ムサシ！ 決闘！ズバツと！超劍豪！』

ムサシパーカーゴーストが覆いかぶさり霊亜はムサシ魂へとチェンジするとともにガンガンセイバーを二刀流モードに切り替え、これを構える

「いっけー霊亜ー！そのままやつつけちゃえ！」

「頑張ってください霊亜さん！」

滯と万理亜が霊亜を応援する

「…以前は一人じゃなかったか？あいつらはなんだ？」

以前会った時にはいなかった滯達の存在に気づいたスペクターが霊亜に尋ねる

「へっ、俺の可愛い妹たちさ」キリッ

「妹だと？お前、妹がいたのか？」

「ああ、血は繋がってないがな」

「……なんだと？」ピキ

話しを聞いた瞬間、何やらスペクターは不機嫌な顔になった

「くだらん」

「っ!?!ああくん?今なんつった?」カチン

「くだらんとやったんだ。なにが血の繋がりのない妹だ。そんなのは上目だけの関係、結局は赤の他人でしかない」

「っ!?!」ピキキ

スペクターの放ったその言葉は滲と万理亜の心に大きな亀裂が出来そうなほどの衝

撃を与えた

「……ぎけんな」ボソツ

「うん？」

「ふざけんなあああああああああ!!!」

突如として霊亜が怒りとともに大声で叫んだ

「俺たちの関係が上目だけの関係だと？結局は赤の他人だと？……ふざけんのも大概に  
しやがれ!!」

「れい……あ？」

「お前は滯や万理亜ちゃんがどんな思いで生きてきたか知らないからそんなことがいえ  
んだ！お前に何がわかるってんだよ！二人の気持ちも知らずに勝手なこと抜かすん



じゃねえよ!!」

靈亜はとてつもない怒りの表情を見せスペクターの言葉を論破する

「ああもう頭きた！俺の大事なもんを侮辱したテメエにはその償いをしてもらうぜ！」

そう言いながらスペクターにむけて剣を構えるのだった

## 第12話 ぐっ…クソオ～!

ベートーベンのアイコンを手に入れ、家路を急ごうとする霊亜たち

男  
しかしそこに霊亜と同様にアイコンに自分の願いを叶えさせるためそれらを集める

仮面ライダースペクターが立ちはだかる

そしてスペクターは出会って早々、霊亜の持つベートーベンゴーストアイコン並びに  
今まで霊亜の手にしたアイコンを奪うべく襲いかかってきた

スペクターの猛攻に苦戦する霊亜だが、やられてばかりにさせじとムサシゴーストア  
アイコンを使い、ムサシ魂へ変化しスペクターに挑む

その戦いの最中、滯たちの存在に気づいたスペクターが彼女たちの関係を探ね

靈亜はそれに答え、自分たちが兄妹であることを告げる

しかしその後、靈亜が義兄妹であることを説明した時

スペクターはつまらなそうな顔を浮かべながら、靈亜たちの関係を侮辱する

それに怒り狂った靈亜は、その勢いのままスペクターへと向かっていった

「おら！うりや！」 カキン！

「ふっ！」 キン！

「おりやりやりやりやりやりやりやりやりやりや  
!!!!」 キンキンキンキンキン！

「ふうふううん！」 キンキンキンキン!

ガンガンセイバーを二刀流モードに変形させスペクターを攻撃する霊亜に対してスペクターは自身の専用武器であり

右手の形を模した武器『ガンガンハンド』を巧みに駆使しその攻撃を防いでいく

「ふっ、ぬん！」

「なっ!？」

「はあああ!!」

「うわああ!!」

スペクターは戦いの中で霊亜の行動を読みきり、隙をついて重い一撃を与えた上に

さらにそこから瞬時にガンガンハンドをポンプアップさせ

そこから露わになった銃口から弾丸が放たれ、霊亜は大きく吹き飛ばされた

「霊亜!?!」

「まさかあの霊亜さんが手も足も出ないなんて」

2人の戦いを離れた場所から見ていた滝と万理亜は霊亜を最も簡単に薙ぎ払うスペクターの強さに恐怖していた

「ぐっ…クソオ〜!」

「しづといな。……ならば」

そう言うときスペクターは懐からアイコンを取り出す

スイッチを押すと同時にドライバーにアイコンをセットする

『ア—イ！ バッチリミロー！バッチリミロー！』

アイコンをセットすると、ドライバーからパーカーゴーストが現れる

「あつ！あれって!?!」

何かに気づいた滯がパーカーゴーストを指差す

それもそのはず、ドライバーから出てきたパーカーゴーストは力を借りようとした時にスペクターに横取りされ、

奪われてしまったノブナガゴーストだったのだから

そしてノブナガパーカーゴーストがスペクターの周りをくるくる周る中

スペクターがドライバーのトリガーを引く

『カイガン！ 我の生き様！桶狭間！』

効果音が鳴り響くとともにノブナガパーカーゴーストがスペクターに覆いかぶさり、  
スペクターはノブナガ魂へと変化する

そしてガンガンハンドを構え、射撃体勢をとる

「っ!？」

「喰らえ！」

バキユン！

「うわわわ!!？」

弾丸を避け、駈け出す霊亜だったが

「逃がすものか!」

スペクターは追撃の弾丸を放ち、霊亜を攻撃する

「くそつ、そつちが銃撃戦をしたいってんなら俺もこいつで勝負してやるぜ!」

霊亜は攻撃を回避するとともに手にしたアイコンのスイッチを押すとともにドライブバーにセツトする

『アーイ! バツチリミナー! バツチリミナー!』

効果音が鳴り響く中、ドライバーからエジソンパークカーゴーストが現れ、霊亜はそのままトリガーを引く

『カイガン! エジソン! エレキ! 閃き! 発明王!』



エジソンパーカ―ゴーストが覆いかぶさるとともに霊亜はエジソン魂へと変身し、ガンガンセイバーを銃モードに変形させる

「はあああ!!」

銃口を向け、雷を帯びた弾丸をスペクターに向けて放つ

「ふん。たあああ!」

スペクターもまたそれをかわし、霊亜に向けて弾丸を放つ

2人は一步も譲らぬ銃撃戦を続ける

「このままじゃ埒があかない、こうなったら!」

霊亜は勝負を決めるべくガンガンセイバーをドライバーにかざす

『ダイカイガンン！ ガンガンミナー！ガンガンミナー！』

ガンガンセイバーの銃口にエネルギーが集まっていく

「スッ

『ダイカイガンン！ ガンガンミロー！ガンガンミロー！』

しかしそれを見ていたスペクターもまた手にしているガンガンハンドをドライバーにかざす

それとともにガンガンハンドの銃口にもエネルギーが充填されていく

「いつけえええ!!!」

『オメガ・シユート！』

「ふっ！」

『オメガ・スパーク！』

霊亜とスペクターは違いに相手に向かって銃を構え、ほぼ同時にトリガーを引いた  
放たれたエネルギー弾はまっすぐに向かっていく

ビリリリリリリ！

弾丸同士がわずかに擦れながら通り過ぎ、霊亜とスペクターに向かっていく

「なっ!? うわああ?!!」

霊亜はスペクターの放ったエネルギー弾をまともに受けて吹き飛ばされた

「っ…ぐううう!?!」

しかし、スペクターは霊亜よりも俊敏な動きでガンガンハンドを盾にして防御体勢をとり

霊亜の放ったエネルギー弾を防御した

「ぐっ…くうう…」

が  
ボロボロになりながらも諦めないと言わんばかりに立ち上がろうとする霊亜だった

「…いい加減、沈め!!」

スペクターはそう言うのとドライバーのトリガーに手をかけ、それを引く

『ダイカイガン! ノブナガ! オメガ・ドライブ!』

「はああ！」

「なっ!?!」

全身から溢れ出るエネルギーを右足に集約させ、スペクターは天に向かって飛び上がる

「はああああああああ  
!!!!!!」

!!!!!!

「ぐわああああああああ  
!!!!!!」

そして右足を突き出し、必殺のオメガ・ドライブを放ち霊亜を遠くまで吹き飛ばした  
必殺技の衝撃は凄まじく、吹き飛ばされたと共に霊亜は変身が強制解除されると共に  
反動でエンジンアイコンを地面に落としてしまった

「霊亜!!」

「澪さま! ……っ!」

澪は吹き飛ばされた霊亜の元に駆け寄り

万理亜は地面に落ちたエジソンアイコンを回収しようと急ぐ

「あとちよつとです!」

エジソンアイコンを回収すべく万理亜が手を伸ばす

「ヒョイ

「あっ!?!」

しかし一歩及ばず、エジソンアイコンはスペクターの手に渡ってしまった

「返してください！それは霊亜さんにとってとっても大切なものなんです！」

「うるさい」ドン

「きゃっ!?!」ドサツ

万理亜がエジソンアイコンを取り返そうとするも

鬱陶しがったスペクターが万理亜を突き飛ばした

そしてそのままスペクターは残りのアイコンを奪うべく霊亜の方に近づく

「ダメ！」

「っ?」

しかし、そんなスペクターの前に滯が立ちはだかる

滯は両手を目一杯広げて通せんぼする

「退け」

「退かない!」

スペクターは滯を威圧しながら退くよう呼びかけるも

それに怯まず滯は一向に退こうとしない

「……退けと言っている」カチャ

ガンガンハンドの銃口を向けて再度、滯を威圧する



「…嫌だ。絶対に退かないんだから！」

しかし、全身が震えながらも滞はそれでも退こうとはしなかった

「……………ふん。興が削がれた」

「っ?」

「今日はお前のその勇姿に免じて引いてやる。……だが、次はない」

そう言うときスペクターは何処へともなく去っていくのだった

「……………あつ!?!霊亜!万理亜!?!」

突然の事態で固まっていた滞だったが、ふと我に返って倒れる霊亜達に呼びかけるの  
だった